

鎧武者の神

仮面ライダー ダーク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

緋弾のアリアと仮面ライダー武神鎧武のクロスオーバー!!!

武神鎧武に変身するとある神が、緋弾のアリアの世界で好き勝手するお話です。

原作を読みながらこの小説を書こうと思ってますのでどうぞご期待下さい。

追加された『特撮・アニメネタ』は剣技や雑談に使われます。

目次

第零章	武神、出陣	
第壹話	前編 始まりは森の中	1
第壹話	後編 神の目的	6
第貳話	前編 情報収集	11
第貳話	後編 伊U勧誘	14
第参話	前編 空からブラッドオレンジ	19
第参話	後編 武神入試	24
おまけ		
登場人物詳細設定 (ネタバレ注意)		29
番外編 其の壱 顔合わせ		33
番外編 其の弍 手合わせ		40
第壹章 武偵殺し編		
装填 準備段階		49
第壹弾 計画実行		56
第貳弾 逆鱗抵触		60
第参弾 断固拒否		68

第零章 武神、出陣

第壹話 前編 始まりは森の中

俺は今、瀕死の状態になっていた。

経緯を話そう。

とあるシヨツピングモールで母と父、兄と買い物をしていて、ガラポンを発見した。ちようど参加資格分買物したので回したら、なんと群馬県への旅行を引き当てたので旅行したのだ。小夜鳴という人が経営してる山奥の小さなホテルで家族四人、貸し切り状態だった。俺は1人じゃないとどうしても寝付けないという訳の分からない体質で、他の3人が寝静まった深夜、脳は起きたままずと目を閉じていた。すると、部屋に小夜鳴さんが入ってきた。何の為に来たのか布団から覗くと、小夜鳴さんは片手に何かの注射器を持っていた。注射が大嫌いな俺は起き上がり、話しかけた。

「何をするつもりですか？」

心底驚いた顔で此方を向く小夜鳴さん。異常に血管が浮き出たり体の筋肉が肥大していて、最早人間じゃないのは一目瞭然だった。

「おやおや……ちゃんと寝てなきや駄目じゃないですか。彼の食事の時間が汚れてしまう……」

その一言で何か良くない事を確信した俺は、勢いよくベッドから跳ね、布団を小夜鳴にかける。跳ねた衝撃で思い切りベッドが軋み、家族は飛び跳ねて起きると思っていたがそんな事は無かった。今攻撃の様な事をした自分の事を追いかけてくるだろうと思つて部屋を出て、ホテルを脱出する。

これで家族が先に襲われてたら元も子もないが、そんな事考えられない程余裕はない。小夜鳴はきつと人間の脳で考えられる事以上の行動を取る。そう思つて走ると、後ろから白銀の狼が数匹追いかけてきている。つまり俺は今現在、狼に追いかけられ死にかけているのだ。

「マジでふざけんな……！」

悪態を吐きながら山を降りていく。狼達は牙を見せながらずっと追いかけて来ている。10にも満たない子供が狼に勝てる訳もなく、どンドン距離を詰められる。すると走るのに夢中だった所為で、断壁に気づかず宙に身を投げた。

直ぐに死を悟った俺は浮遊感に恐怖し、目の前が真つ暗になっていった。

「望みを言え。どんな願いも叶えてやろう」

…声が聞こえる…死んでないのか。でも起きたくない。あの化け物から逃げられる気がしない…

「力を望むか？不死身の奴を退ける事は可能だぞ」

……家族を守りたい……その為に力をくれるなら欲しい！

「……残念ながら貴殿の家族は既に喰われた。今、魂が船に乗った所だ」

船……？死んじやったのか……？お前は一体何者なんだ？

「私は、冥界に住む神の石柱。死者の魂を冥界に送る仕事を任されている。」

…死神か…そっか、家族は死んじやったか…アレから守れると思っ
てたのに……

「悲しむ事はない。貴殿が望むなら家族一緒にしてやろう。…まあ、

貴殿の体を貰う事になるが…」

……まあ、なりたい夢とか無かったし…良いかな…
家族と一緒にの方が…いい。

「契約成立だ。良き死後生活を送るといい」

「グババババ！人間にしちや頑丈だな！あの高さから落ちて原型を留めてるとはな！」

来たか…私が憑依した事によって肉体を再生させたに過ぎないが、そんな事は奴に話す必要は無い。

「今回の血は中々美味だった。1人だけ逃すなんて事にはさせねえよ」

成る程。こいつは吸血鬼か。音はこいつの巨体1人分だけ…狼達はいないか。それなら丁度良い。

「さて、それじゃさつさと…頂くとするか」

奴が手を伸ばして来た…今だな。

「触れるなよ俗物が」

うつ伏せ状態から足を踏み込み、奴の横を通り愛刀で斬ってやる。

「……………あ？」

一瞬見失ったのだろう。奴が振り返ろうとする。だが直ぐ違和感を感じるだろう。何故から……………

「なんだ、そこに……………？」

奴は気づいただろう、振り返ってるにも関わらず下半身は顔の逆を向いている。

当然だ。私が上半身と下半身を斬り離してやったのだから。

「……………な……………ぬあああ!!!」

ドシン!!と落ちる音がした。上半身が地面に転がったのだろう。

「…何故だあ!!貴様!!何処に武器を!!」

「貴様に教える筈なからう。人に仇なす愚かな生物よ」

私は奴に体を向け、奴の事を見下してやる。

「な……………お前…性格を変えられるのか…」

「阿呆。性格以前の問題だという事位分かるだろ。これだから人間を下に見る吸血鬼が……………」

「ああ!？」

ああ……………とても良い空だ。気分が良くなる。この自然豊かな場所

と綺麗な空に免じて、名乗ってやるとするか……

「私は……冥界に住む神の支柱。鍛冶神、武^ぶノ神黒紅^{かみこくこう}!!!!

冥界神の命によりこの現世へ、この人間の体を貰った!!!!

私の目的はただ一つ!!!! 人類の救済である!!!!

ああ……今回の仕事は楽しくなりそうだ!!

第壱話 後編 神の目的

私の名は武ノ神黒紅。詳細は後々話す、今現在吸血鬼の前で名乗っていたところだ。私の目の前で上半身と下半身に分かれて転がっている吸血鬼は、頑張つて這いつくばり下半身との結合を試みている所だ。

「ゲバ…ゲババババ…：…神と名乗るか…：さつきと打つて変わつてとんだイカレ野郎を目の当たりにしちまつたぜ」

おお、こいつ信じてないな。というかこいつはこの体と初対面の筈…：一度見た様な物言いは少し気になるな。

「神を愚弄するか吸血鬼。というか初対面だろう。さつきとは何の話だ」

「さつきはさつきさ。ベッドから勢いよく出て家族を見捨てた臆病者が、オレの目の前にいる奴さ…」

…：成る程。小夜鳴とかいう奴とこいつは同一人物という訳だな。視界も記憶も共有してる。

「残念ながらその臆病者の魂は私をこの体に移す生贄となった。もうお前の知る人間はここにいない」

「ゲババババババ!!まだ神と言い張るか!そういうのを『厨二病』とか言うんだろ?」

一般的な知識も共有か。そしてこの挑発の仕方…：既に再生は完了しただろうな。

「成る程、やはり俗物には理解が難しいらしい。ならばもう一度切り

捨て、認めさせるか」

私は霊力を使い、この少年の体と服を作り替える。

10代未満から前半と思われる体を成長させ、服は繊維と色料を変
える。

「…………お前…………魔法使いか」

「神と名乗っただろ。そんな事も分からんか」

大体マツギとか何ぞや。この世界特有の言葉か？後で色々調べな
いとだな。

「…………ん？」

背後から殺気…………これは…仲間か？

「お父様に…………!!何をした!!!」

若い女の声の後にバチィィィン！と空気が割れる様な音が後ろ
からやって来た。この音は電気系統だな。直ぐ様体を45°程曲げ
避ける。電気は真横を通り、地面を焦がしていった。…………ふむ。人間
なら心臓を止めれる電圧だな、これは。

「な…………私の攻撃が…読まれてた…?!」

「数秒前から殺気に気付いていた。ならばどういふ攻撃だろうがこう
避けていたさ」

体を傾けたので、声の主を確認する。

先に目についたのは鮮やかな金髪とそれを纏める黒いリボン、赤い
目だ。蝙蝠の形の翼を見れば、人外という事は想像し易い。そして攻
撃時の発言通りであれば、この少女も吸血鬼であるという結論が出

る。

服装はフリフリが多めのドレスみたいな奴を着ている。多分ごしつく何とかと言う奴だろ。胸元は若干大きめに開けてある。開けすぎて心臓を狙われないか心配だな…。見た目通りの10代後半なら胸は大きめだな。吸血鬼の本当の年齢なぞ興味ないが。

「ヒルダ!!何故来た!お前には後始末を任せた筈だぞ!」

「そんな事直ぐに終わらせましたわ。それよりお父様!いつまで這いつくばっているおつもりですか?そんな人間、お父様ならさっさと殺してますでしょう?!」

この小娘、父親と同じ目に合わせてやろうか?

「残念ながらいつまでも此処に留まるつもりは無い」

腰まで届く肩マントの内側に右手を伸ばし、愛刀を取り出す。

日本刀と似た様な形状、鍔部分には銃口とスライド式スイッチが搭載されている。

其の名は、『無双セイバー』

「あら?人間の癖に生意気ね。無限罪のブラドと呼ばれるお父様に血を吸われる事がどれだけの幸福か分からないのかしら?」

「貴様ら吸血鬼の相手より大事な事があるのでな。失礼する」

銃モードに切り替えるバレットスライドガンモードの際に使用する弾丸装填用のスライドスイッチ。を引いて、地面に向けて射撃し煙を撒く。目眩し程度ならこれで充分だろう。

「ちよ……ああもう!!絶対に貴方の血をお父様にプレゼントするんだからー!!!」

「……………さて。本来の目的に戻るか」

あれから数時間後。私は奇妙な植物が生える深い森の中に身を潜めている。勿論さつきいた森とは次元的にも違う場所に移動している。

「…まずは武装を増やす事か…」

左手に持つ、赤い果物の装飾を施された錠前型の機械、『ブラッドオレンジロックシード』を見ながら呟く。

冥界から現世に来る際許された装置で、他にも数種類持ってきていたと伝えたが現地調達&精製を言い渡された。まあ流石に最初からフル装備は人間に優しくないのは事実。だがどういった方法で作って良いかは言っていないかったので、持てる神の力を使ってつくるつもりだ。

「……………社畜っていうのかな……………私の現状は……………」

私がこの世界に来た理由は人類の救済と高らかに宣言したが、別に魔王が世界を支配するとかそんな大規模な話じゃ無い。

冥界神からの新規業務は『死者の削減』である。

冥界は知つての通り死んだ人間の行き先。だが死んだ人間が多すぎるといくら冥界でもパンクしてしまう。そこで、死者の魂の整理整頓をする為に新規の死者を出来るだけ減らす神が必要となったのだ。年を重ねる度に生者と死者の数が増えていく時代になったので、冥界を楽しむ者には全盛期の姿を提供したり、思う事がなければ冥界のエネルギー、姿を持たせず人魂の様に丸くし収納とかするのだ。

つまり、『死者削減』の過程として『寿命を延ばす、人助けする、命を守る』事になるのだ。

「…人間社会に拠点を作らなければ…」

さっきの吸血鬼の一部の言葉が分からなかったと言うこともあり、この世界での常識も必要だ。しかし武装を増やす事もあるので、材料を手に入れられる必要がある。最悪、悪党達と契約し仕入れする羽目になる。

「……取り敢えず、交流だな」

此処にいても知らない物が知れる訳ではない。移動して情報を集めよう。

ロックシードの鍵を開け、空間に穴を作る。チャックの様な穴の向こう側には、海が見える。付近には何も無い様だ。

周囲を警戒しながらこの空き地らしき陸地に足を置く。人に見られる訳には行かないのですぐに穴を閉じる。

改めて周りを見渡す。陸地から陸地への巨大な橋、長方形ばかりの出島のような陸地、今私がいるこの島には風車が数m間隔ですらりと並んでいる。前後を見渡し、目測2kmとその半分未満の辺による長方形と仮定する。いやしかし本当に何も無いな。風車しかない。

「……さて、先ずは情報収集か」

そう意気込み、私は『空き地島』と呼ばれる場所から出て行こうとするのだった。

第弐話 前編 情報収集

風車しかない小さな島から抜け出した私は、街中へ移動しまず図書館へ向かった。あのブラドの言っていたマツギというのが気になるし、この世界の現時点知識を得るなら本が1番だろう。新聞も確保すれば大きな事件を知らないなんていう問題が起きずに済む。

まあ、この世界に来て直ぐだから金が無いだけなんだが。この体の持ち物もあの屋敷でヒルダという娘に片付けられてもう無いだろうし。

図書館に着いた私は、先ずこの図書館に残ってる新聞全てを拝見出来るか交渉した。奇異な目で見られない様マントはちゃんと外してゐるぞ。

司書は「今直ぐ出せる物は7年分くらい」との事でそれを任せた。その後辞典や興味を引くものを棚から引っ張り出し、長机で3人分の席を陣取りながら全て読んでいった。気づけば閉館時間になっていた事に驚いた。

新聞を読んで分かった事は、この世界は2007年で今私が居るこの世界には東京の東京湾に人工浮島メガフロートが作られており、『武装探偵』を育てる『学園島元は空港滑走路として使われるはずだったため、南北2キロ東西500メートルと細長い形をしている。島内には校舎や寮のほかにも、コンビニやファミレスなども。島の端のほうにはレインボーブリッジに向けて立てかけられた巨大看板があり、その裏側は特訓などに使う絶好の空き地になっている。交通網としてはモノレールが通っており、生徒たちはしばしば近くにある台場に遊びに行くようだ。駅のそばにはゲームショップ、DVDレンタル店などが集まり、ちよつとした商店街を形成している。」と先程私が居た『空き地島』があるという事だ。

ある程度情報を収集したので、付近の街を歩く事にした。
シヨツピングモール、ゲームセンターなど若者が好みそうな場所から居酒屋、古本屋など自分が好きになりそうな店を見て回る。

この街は犯罪率はやや多めだが、死亡率を考慮したら大分平和な場所だ。なのにこの世界に派遣されて『人類の救済』を命じられるという事は：戦争でも起きるのだろうか…。

街にある店の場所を大体覚えた所で、誰も来ることの無い空き地島の入り口へ向かう。さて、此処なら大丈夫だろう。

「さつさと出て来たらどうだ？私が図書館から出てきた時から尾行していたらどう？」

まるで監視されてるかの様な視線があると思いうろウロと色んな場所を寄り道していたが、悪意というより興味アリの視線だった為こうして人気の無い空き地島まで歩いたのだ。悪意があつたら？学園島に忍び込んだ。

「何処の誰かは知らないが、今なら穏便に話をしてやる。さつさと姿を現すか用件を言え」

術で腰と肩のマントを出現させ、殺気を少し出してみる。

これで何も反応無かつたら悲しいな。

「そんなに警戒しなくて結構です。私は貴方の事を殺しに来た訳では有りませんので」

返ってきたのは優しげで、しかし凜とした女性らしい可憐な声だった。

声のする方に顔を向けると、黒いぼろ布でその身を全て隠している人間がいた。

「ヒルダさんから連絡があつたのです。ブラドさんの体を真つ二つに斬り落とし、地に伏せさせた奴がいるから一刻も探して欲しいと」

「ああ……成る程」

あの小娘本当に俺の血をブラドにあげるまで追いかける気か？

「吸血鬼と友人か…お前も人間でないのか？」

「いいえ。私は人外で無ければ超能力も無い人間です」

良かった。吸血鬼みたいにプライドの高い人外とかだったらうんざりして斬り捨てるところだった。

「それで？私をヒルダに差し出すのか？言っておくが簡単には従わんぞ」

肩マントの内側に手を伸ばし、ある物を掴む。いざという時はこれを使うか…。

「いいえ。私はそこまで仲良しさんでは無いので、貴方の四肢を斬り落としてまで連れて行くつもりはありません。その代わりと言ってはなんですが、お願いを一つ聞いてくれませんか？」

「ほお？」

まあ常識はある方だと確認は出来た。肩マントから手を出し、何もするつもりはない事を示す為に腕を組む。

「良いだろう。願いを聞いてやろう」

「では……」

私のいる組織、イ・ウーに入つて貰えませんか？」

第弐話 後編 伊U勧誘

「…い・うー？」

「はい。是非とも、入っていただきたいのです」

「いやいやいやいや」

脈略もなく突然勧誘されてしまった。常識がある方だと思っ
たが全然そんなことなかった。

「申し遅れました。私暗龍・J・刀子あんにゅう・じ・とうこと申します」

ぼろ布のフードを外して、彼女は名乗る。…ふむ、中々の美少女：
黒に近い鼈甲色の瞳、灰色に近い薄紫の髪……そして少女と思える童
顔。ロリコンでは無いが何かを感じる。おつといかんいかん。話の
途中だったな。

「随分と今更だな…私は名乗る必要は無いな？此処まで追ってきてる
んだから、名前などの情報は貰ってるのだろう？」

ヒルダにもブラドにも名乗っているし。

「いえ、彼女からは外見しか聞かされてないのです。何でも、偽名とし
か思えない名乗り方をしていたから聞いても意味がないというか」

「凄いい失礼だなあいつ…」

次に会ったら舌を切つてやろう。

「まあそういうことなら仕方ない…私は武ノ神黒紅。冥界より馳せ
参じた神である」

ちゃんと名乗ろう。堂々としていれば偽名と思われなだろ。そ
う思つて彼女を見ると

「…自分をファラオと名乗る人は居ましたが神と言う人は居ませんで
した…」

「やめろ！私をそんな目で見るな！事実しか言つてない！」

可哀想な者を見る目で此方を見ていた。なにかを心配されている様にも見える。

「…大丈夫ですよ！私は心療内科は専門外ですが、貴方の事を任せられる人はいます！」

「頭がおかしくなった訳でも二重人格でもないわあ!!」

「はあ…はあ…と息を荒げてしまう。やはり今後は人間として動く必要があるのか…」

「…イ・ウーという場所は、具体的にはどういう場所だ？」

「…そうですねえ…国際犯罪組織ですね」

「ですね。じゃないだろ」

まさかの国際犯罪組織か。組織に入りたいとは思っていたが…これは抵抗あるな。

「イ・ウーに属せば、凡ゆる痕跡を消して活動が出来ますよ？国籍、クレジットカード、ポイントカードとか」

よくそこまで消せるな…これが国際犯罪組織のスペックか…

「私自身には元々個人情報はないんだが…ああ、この体の元々の持ち主の情報は消してほしいかな…」

魂は逝ってしまったからな。私の名前に書き換えるとかしたほうがいいかも知れん。

「ヒルダさん達に殺される予定だったんですよね？なら心配ありませんよ。既に情報操作できる様になっています」

「……凄いな…」

此処でイ・ウーに入って情報操作を任せるか……よく考えたら犯罪組織が嫌なら内部崩壊させてやれば良いか。どうせそんなに長い付き合いにはならないだろう（適当）

「良いだろう。入ろう」

「ありがとうございます」

ニコツと笑ってくる暗龍「では私の事は刀子とお呼びください…え？」

「……今なんと？」

「刀子とお呼びください」

「…ふむ…」

果たしてこの距離感の詰め方は正しいのだろうか…まあ本人が望んでいるんだ。呼んでやるか。

「それで？イ・ウーに入るには試験は必要なのか？」

プロフェッショナル
「教授と戦う必要になるかも知れませんね」

「教授…ねえ…大層な肩書きだな」

「貴方よりは控えめかと」「違ういな」

それにしても教授か…ブラドやヒルダより上と考えたら大分人間離れしてるな。そんな事考えながら刀子に導かれるまま歩いていく。すると海沿いに簡易ドックがあり、その中には魚雷があった。…うん、誰が見ても魚雷だと思う。

「おい。何だこれは」

「オルクスという名前の潜水艇です。あ、3人乗りなのでスペースは大丈夫ですよ？」

「閉所恐怖症じゃない。そんな事より…これ魚雷だろ？」

「潜水艇です。………元魚雷です」

喋ってる途中で睨んだら素直に言ってくれた。やはり魚雷なのか
こいつ…

「それで？これに乗ればイ・ウーに行けるのか？」

「はい。少し時間が掛かりますが、寛いでくれたら幸いです」

「はあ…」

刀子の運転でこの潜水艇はイ・ウーへ向かうらしい。

私は着くまでの間、仮眠をとることにした。何気にこの体になって初めて睡眠を取ったが、狭い潜水艇の割には安眠出来た。何か良い匂いしてた気がするが気のせいだろう。刀子の匂いで安心してたら本当にロリコンだぞ私…嫌だな…。

そんなこんなでイ・ウーに着くまでぐっすり寝てしまった。

イ・ウーは潜水艦だった。めっちゃ広いな此処…

「教授はずっと同じ部屋に居るのか？それともウロウロ歩いて突然居ないとかあるのか？」

「何ですかその老人みたいな…まあ、あながち老人で合ってるかもしれないですね…」

ん？何か含みのある言い方だな…

「どういう事だ？」

「会えば分かりますよ」

「…そうか」

そんな会話してる間に、どうやらいつも居る部屋に着いたようだ。刀子が部屋をノックするが、返事が聞こえない。

「…まさか本当にこの中を徘徊してるのか？」

「徘徊は日課では無いので大丈夫かと…」

すると、ドアから返事がした。

「ああ、入りましたまえ。読書に夢中で返事が遅れてしまつてね。すまないね」

格の違いを見せつけるような、カリスマ性を感じる男の声。

だが私には全く意味がない。

所詮は人間の技だ。神に通じる訳がない。

軽く挨拶し、部屋に入る。

どこまであるのか分からない程高い本棚。その全てを埋め尽くす本。

小さなテーブルにルーペと新聞。部屋の中心のチェアに腰掛ける男。

大柄でありながら痩せている体。鷲鼻と角張った顎。口にはパイプ、肘掛に立てかけてるのはステッキ。図書館にあつた凶鑑の写真通りの顔である。

「成る程…イギリスの冥府神も血眼に探してると思つたら…」

まだ死んでなかったか。シャーロック・ホームズ」

教授：「シャーロック・ホームズが私の目の前にいた。」

第参話 前編 空からブラッドオレンジ

「…随分と…面白い事を言う子だね。私でも推理出来なかったよ」
驚いた様に見える。目を見開くシャーロック。

面白い事を言ったか？……事実しか言っていないよな…

「子供扱いするな。今はこんな姿だが、一応2500年生きているんだ。神換算で25だ」

「…ブラッドからの報告で、神と名乗る精神疾患者と仮定をしていたんだけどね。中国には孫悟空だっているし、君の言葉の方を信じてみるのも悪くないかな。それで？僕が死んでなくて何か噂になってるのかい？」

いたのか孫悟空。あれも架空の人物と思っていたんだが…この世界は架空の人物が実在する世界か？というかブラッド。お前本当に人を小馬鹿にし過ぎだぞ次は心臓を刺してやる。

「事実、冥界のイギリス担当が『ホームズ家の初代が全然来ないし何処にいるのか分からない』と泣いていたぞ。あんまり長生きすると此方も困るんだが」

長生きする事は別に悪い事ではない。健康的な証拠だからな。

だが無闇に寿命を延ばすなら話は別だ。

全ての生き物はちゃんと生きて死んで貰わないと困る。

この男の様に自分を死んだことにして生きている場合、子孫や憧れる人間は『一度見ておきたい』という願いが叶えられず、無理矢理冥界から抜け出し怨霊になる可能性があるからだ。

怨霊が人間界に出てくると世界に綻びが発生する。だから陰陽師という職業が存在するんだ。

世の中には陰陽師と同等かそれ以上の力を持つてる只の人間がいるみたいだが…

「ああ、そこは心配無いよ。僕の推理では、2009年7月25日には老衰で死んでしまうよ」

ニコツとしながらそう伝える。自分の死期は既に推理済み…か。

「その推理が当たる事を祈るよ」

どうせタダでは死なねえだろうけど。

「…あのお……そろそろ話を戻しても良いですか？」

「…ん？ああ忘れてた…すまないな刀子」

いかんいかん。私が話しかけて話が進まなくなってたな。

「いえ…貴方への認識を改められたので大丈夫です」

「ん？どういう事だ？」

「…私も貴方の言葉を信じるという事です」

「ほお」

諦めずに説明した事が身を結んだか。良かった良かった。

「教授。この方…武ノ神黒紅さんをイ・ウーに入ってもらおうと思つて連れてきました」

「ああ成る程、それで連れてきたのか…私の推理には武ノ神君の存在自体、計算外だったんだけどね。…ふむ…武ノ神君が…」

此方の世界にとっては私の存在自体あり得ないからな。計算外なのは仕方ない…

「成る程。なら少しテストしようか」

「なんだ、入団試験か？」

「どちらかと言うと入学試験だね。このイ・ウーは互いに生徒で教師。凡ゆる事を教え合う場にもなっているんだよ」

成る程…放任主義の極みな学校という訳か。面白い物だ。

「どんな入試を行うつもりだ？」

「君の…というより神の存在の証明として、僕と戦うと言うのはどうだい？」

「絶対好奇心からだよなその提案」

にやけてるし、目尻下がってるし、盲目の筈なのにキラキラした目で見てるし。声が楽しみなのを隠してない。

「…はあ…まあいい、勝手にしてくれ。私は受ける側なんだからとかく言わない」

「お気遣いどうも。それじゃあ移動して、君の力を見せてもらおうか」
そう言いながらシャーロックはステッキを掴みながら椅子から立

ち上がる。

「…盲目とは思えん軽やかさだな。行動の全てに推理を使っているのか？」

「え？」

刀子が声を出しながら此方を見て驚いてる。シャーロックも驚いた目で此方を見てる。何だ知らなかったのか。

「…凄いな君は。今まで見えてる様に振る舞ってきたつもりなんだけどね。参考までにどうして分かったか聞いてもいいかい？」

「簡単な事だ。瞼の筋肉の動き方が意図的のものだからだ」

本来驚いた時の目元の変化は電気信号の所為なので、他の部分はあまり動かない。

シャーロックは無理矢理動かしてるので、動かしてる皮膚が多過ぎる。

分かりやすく言うと、本来上下の瞼しか動かないのにシャーロックは頬の皮膚とか僅かに動いていたのだ。

「…成る程…僕もまだまだ、と言う事だね」

「安心しろ。私みたいな人外の最高峰な奴は居ないからな。見られてバレルのは私以外居ないと思ってくれていい」

「はははっ。君は優しいんだね。おっと、また話し込む所だったね。行こうか」

ステッキを持ちながらドアノブを難なく回し、部屋を出るシャーロック。

刀子はドアの音がするまでずっと驚いていた。…そんなにシヨックだったのか。

私達もシャーロックの後ろを歩き、案内されていく。

潜水艦の中でブラドも戦えるとなると、一体どこまで広いんだろうな。

「君の持つ力は、ブラド君の様に巨大化したりするのかな？」

「心配するな。今は材料が無いから巨大化は出来ない」

「というか戦った事あるのかブラドと。教授という肩書きから察するに、イ・ウーのNo. 1という所か。」

「材料…？何か必要なのですか？簡単な物なら用意出来ますよ？」

不思議そうに此方を見る刀子。その気遣いは良いが敵に塩を送る事と変わらなくないか？それは。

「…いや、入試が終わってからでいい。この世界に来てからの小手調べでもあるからな」

「ははははっ。君と戦う事が楽しみになってきたよ」

遂に隠さなくなったなこの老人…だがまあ、楽しませてやるか。実際私もこの力が通じるか楽しみではある。

そんな風に会話していると、甲板へ出れる耐圧扉の前に着いた。

まさか浮上してるのか？国際機密犯罪組織なんたる??

「安心したまえ。この潜水艦は核ミサイル搭載の原子力潜水艦だ。誰も手出しは出来ないよ」

「その言葉の所為で別の不安が出現したのだが」

この老人本当に何考えてるのか分からん。未恐ろしいわ。

甲板に出てきた私達は、数m離れて向かい合う。危険なので刀子は耐圧扉付近にいてもらってる。

「ありきたりな言葉だろうけど一応言っておこうか。」

『さあ、君の力を見せてくれたまえ』とね」

「では、お言葉に甘えようか」

肩マントの裏側の特殊空間から、あるバックルを取り出す。

この世界に来る時に許された装備の大本。

これが無くては意味が無い。

バックルを前面の腰に添えて、ベルトを出現させる。バックルの左側、空白のプレートに鎧武者の横顔が出現する。

『戦極ドライバー！』

右手にブラッドオレンジロックシードを持ち、解錠する。

『ブラッドオレンジ！』

音声と共に、頭上にジッパリの様な扉が開き、禍々しい黒い蔭が描かれた赤いオレンジをの形をした鉄の塊が空中に浮かぶ。

「刮目せよ。これが私の、武神の姿である」

ロックシールドをドライバー中央に嵌め込み、ロックする。

『ロックオン！』

ドライバーからエレキギター音が鳴り響く。音に合わせて塊の間が赤く発光する。

「 変身 」

ドライバーのブレードを倒すとギター音が鳴り、ブラッドオレンジがゆっくり落ちて顔を隠し全身を特殊なスーツで包み、展開して鎧へと変貌する。

『ブラッドオレンジアームズ！』

邪ノ道オンステージ！』

ブラッドオレンジアームズが完全に展開し終わると、果汁が溢れて散る。右手は大橙丸変わった日本刀を握っていた。その刃をシャーロックに向ける。

「行くぞ名探偵。」

此処からは、私の勝戦ステージだ！」

第参話 後編 武神入試

高らかに『勝ち戦』私が勝つと宣言する。私の発言を試験開始の合図にしたのか、シャーロックは早速発砲してきた。

シャーロックの右手元が光り、私の目にあたるマスク部分とドライバー、装備の薄いスーツ部分〔ライドウェア〕鎧の下に纏うアンダースーツ。戦極ドライバーによって制御されており、変身した者の全身を覆うことで保護して身を守り、基礎的な身体能力を大幅に向上させる。に銃弾がぶつかり弾き飛ぶ。

「素晴らしい射撃だ。この時代の技術が私の様な装備をしていたなら、既に戦闘不能になっていただろう」

「そのドライバーを破壊すればと思ったけど、対策済みだったか」

「否。これは最初から既に完成している。人間の武器銃如きで破壊される様な物では私の神器にならない」

シャーロックに向かってゆっくり歩き出す。シャーロックはまた見えない銃を使い射撃してくるが、鎧とスーツは全て弾いてしまう。

リロードしてる時間が見れないが、発砲の際の光は点滅していて、音は1発に1回鳴っている。つまりマズルフラッシュが点灯の様に見えるマシンガンではなく自動式拳銃か単発式拳銃の種類だ。

大橙丸で防御すると、武器破壊を狙ってか大橙丸の刃の根元一箇所に10、20発の銃弾が集中して撃ってくる。

成る程、並の刀ならこれで壊れるだろう。だが、

「甘く見たな…名探偵!」

大橙丸での防御を解除する。好機と感じたであろうシャーロックは私に向けて銃撃する。

一箇所に向かって飛んでくる一列の弾丸。その銃弾に向けて振り下ろし、飛んできた弾丸を全て斬る。

3発の弾丸は真つ二つに割れ、後ろに飛んでいく。

「何と…?!」

予想外だったのか、動きを止めるシャーロック。甲板を歪めそうな程強く踏み込み、格好の獲物となったシャーロックとの距離を詰める。

反応したシャーロックは懐からアーマーナイフを取り出すが、大橙丸の横薙ぎにより持ち手と刃の境目を斬られる。「カヒノジン」パウセルが生み出す膨大なエネルギーを利用して物質の化学結合に作用する特殊な刃。通常の刀剣では実現不可能な切断力を生み出すことが出来る。

「せやあああー!」

右からシャーロックに斬りかかる。するとシャーロックは左手のステッキを使って防御を取る。ステッキに大橙丸の刃が沈むが、途中でギイーン!と刃と刃のぶつかる音が鳴る。

「仕込み杖か!」

「切り札は隠しておくものだからね」

そう言った後に右手から眩い光が放ち、私の腹部に5発程射撃する。

「っう!!」

この距離での射撃は流石に堪える。撃たれた衝撃で二、三步下がる。

追い討ちの様に1発撃ってくるが弾き飛ばす。

「神器に近い武器…貴様、聖剣の類を隠してるな?」

「これ以上の詮索はやめてくれると助かる。これは女王陛下から借り受けてる剣だからね」

「語るに落ちたな名探偵。今の発言で全て理解したわ」

「内緒にしてくれると助かるよ」

ステッキの中に入っているのは十中八九騎士王の剣だろう。聖剣と呼ばれる様な剣は山ほどあるだろうが、国王自ら貸し与えるとなると国宝の中でも少数になるだろう。シャーロックホームズの故郷イギリスなら、該当するのは騎士王の剣と推測が出来る。

「ずっと中に入れておくつもりか？その剣で無ければ私と太刀打ち出来ない」と理解は出来ているのだろうか？」

「そんな簡単に引き抜いていい剣では無いからね。僕の射撃のカラクリを君が暴くまで使わないべきか迷ってる所だよ」

「はっ！カラクリが分かる前に私に負けるなよ！」

大橙丸を左手に持ち替え、右手で腰のホルダーに付けられた無双セイバーを抜刀し、シャーロックに近づく。シャーロックから射撃が来る。

まず無双セイバーを振り下ろし2発弾き、引き際に大橙丸を振り下ろし2発弾く。その間もシャーロックの銃は弾切れを知らない様に大量に撃ってくるが、この鎧には関係ない。二刀の間を通る銃弾は鎧に弾かれ何処かへ行く。

二刀流で弾きながら近づくにしては弾幕が多いので、此方も射撃をするでしょう。無双セイバーのスイッチを引つ張り、電磁弾エネルギーを放つ。

シャーロックからの銃撃は無双セイバーの弾丸が数弾吸い込むように溶かし、消していく。その過程で無双セイバーの弾丸は空中で霧散し、消えていく。

シャーロックは射撃手段を持つてるとは思ってたのか、少し手先がぶれて弾丸が私の左側を通り抜ける。その隙に大橙丸と無双セイバーの柄頭同士をくっつけ、無双セイバーをナギナタモードにする。

「決着をつけるぞ！名探偵！」

ナギナタを風車の要領で振り回し、弾幕を弾き飛ばしながらシャーロックに近づく。そろそろ限界を感じたのか、シャーロックはステッキの持ち手を強く握りしめる。

「おおおおおおお!!!」

十分な距離まで近づけた私は、無双セイバー側の刃を持ち攻撃範囲を無理やり広げて、シャーロックの手の銃を上空に弾く。古銃と呼ぶに相応そうな、金色の銃だった。覚悟を決めたのか、ステッキから剣

を抜こうとしたシャーロックだがもう遅かった。

シャーロックの銃が浮かんでいる間に、戦極ドライバーのブレードを下ろす。

『ブラッドオレンジスカッシュー!』

ナギナタが紅いエネルギーを纏い、紅く光る。ナギナタを振り回し、まずステッキを持つ手を切りつけステッキを落とさせる。更にシャーロックの左肩を切り裂き、最後に右肩から脇腹へ斜めに切り裂く。

「ぐっ……!」

呻き声を上げ、膝立ちになるシャーロック。そのシャーロックの首元にナギナタの刃を添える。

「私の勝ちだ。名探偵シャーロックホームズ」

手と両肩を負傷したシャーロックは、ふふふつと笑う。

「……素晴らしいよ。イ・ウーで僕を斃せる者は誰一人居なかったのに、君はそれを覆した……。これで君は、イ・ウー真のNo. 1だ。

おめでどう武ノ神 黒紅君。君は神の存在を立証した。

この僕を倒したという結果でね」

「ふん。そんな序列の様な物。興味無いわ」

私はロックシードの果実パーツを折り畳み、変身解除する。

「それで? 私はイ・ウーに入れるのか?」

そう聞くと、シャーロックは吃驚した様子で此方を見る。

こいつまさか入学試験と言った事忘れたのか?

「……いいのかい? 君はもう学ぶ事はない様に見えるが」

「阿呆。まだこの世界の事は7年分しか知らんわ。超能力もよく知らんからな。此処で世話になりたい所だ」

怪我してるシャーロックに肩を貸し、立たせる。

血相を変えた刀子が走ってくる。

「……はははっ。やっぱり君は面白いね……」

イ・ウーによろこそ。残り2年くらいだが、良き生活を送りたまえ」

「言われなくても、そのつもりだ」

こうして私は、この世界の居場所を一つ、見つけたのだった。

武ノ神黒紅

所持ロツクシード

ブラッドオレンジ

??????

おまけ

登場人物詳細設定（ネタバレ注意）

武ノ神 ぶのかみ 黒紅 こくこう

仮面ライダー武神鎧武 かめんがじんがいむ

身長：180cm 体重：66Kg

冥界で2500年前から（日本では縄文時代終盤）生きてきた。

冥界からやってきた鍛冶屋の神。人間態では人間でいう25歳。

DとSランクのロックシード全てを扱う事が可能。

第一話の時点でヨモツヘグリロックシードとブラッドオレンジロックシードを所持しており、ヨモツヘグリの力で冥界を、ブラッドオレンジの力でヘルヘイムの森そっくりな結界を作り、現実世界と繋げることが出来る。

現世↓ヘルヘイム↓現世と二重にクラックを開いて瞬間移動が可能。但し、行ったことの無い場所に向かおうとすると知らない土地に繋がる。

神の力を用いてロックシード、ドライバー、アームズウェポンの精製が可能。

15歳のモブな人間の少年の体を使い、現実世界に来た。少年の魂はヒルダとブラッドに殺された家族と共に冥界へ送られた。

人間界に来た理由は『死者削減』であり、遠くない未来に起きる大量の死人が出る事を未然に防ぐ事が任務である。

いつ冥界に帰れるかは不明。

イ・ウーにおいてはNo. 1であるシャールックホームズを超える力であり、イ・ウーメンバーからは『No. 0』『神（真）No. 1』と呼ばれる。

16歳と偽り2008年に東京武偵高に入学。

この時点で^{アムド}装備科、^{アサルト}強襲科Sランクである。
装備

・44オートマグ 日本刀(70cm)

・戦極ドライバー 無双セイバー ロックシード

(マツボックリ クルミ ドングリ メロン パイン

イチゴ バナナ ブドウ スイカ マンゴー ドリアン

キウイ ブラッドオレンジ ウォーターメロン ザクロ リンゴ

ヨモツヘグリ レモンエナジー チェリーエナジー ピーチエナ

ジー メロンエナジー マツボックリエナジー マロンエナジー

(ドラゴンフルーツエナジー)

^{あんりゆう}暗龍・^{ジャック}J・^{とうこ}刀子

^{かめん}仮面ライダー^{りゅうが}龍牙

身長：168cm 体重：56Kg (84・60・79)《G》

猟奇殺人事件の犯人、ジャック・ザ・リツパーの孫娘。

黒に近い鼈甲色の瞳、灰色に近い薄紫の髪、童顔。

黒紅と出会った時点では15歳の少女。この時既に不良、ヤクザの腹部を切り裂き多くの人間を病院送りになっている。(まだ誰も殺していない)

『平成の切り裂きジャック』『霧刃^{むじん}』と呼び方は様々。

身長以上の長さの黒いボロ布で顔ごと身を包んでる。

布の中身はライダースーツ、更にその中身は下着と見間違える程の薄着

(FGOのジャック・ザ・リツパーの服装)である。

ミニスカ、全身タイツ擬きを着たりするが基本は上記の服装である。

父親の暗龍 京はこの世界の仮面ライダーリュウガである。腎臓癌で死亡しており、父親の死後は刀子が契約者となっている。オリジナルヒロイン。但し遠山キンジではなく武ノ神黒紅のヒロインである。

2008年に東京武偵高入学。その時点で諜報科、衛生科Aランク

武装

・小型ナイフ(30cm) コルトデイフエンダー 煙玉 コンバットナイフ 肉切り包丁

・カードデッキ(リュウガ)

使用可能カード

アドベント ソード ガード ストライク コピー ファイナル
コンファイン スチール リターン ストレンジ サバイブー烈
火ー

遠山 金次

原作と違い、黒紅と相部屋になる。一般高校に転校する事を目指す事は変わらないが、黒紅から励まされて兄の金一が死んでない事を心の何処かで信じている。

星伽 白雪

改変無し。黒紅に恋仲を応援されてトリップする事が多々ある

神崎・H・アリア

改変無し。黒紅にキンジとの仲を揶揄われる。

理子・峰・リュパン4世

イ・ウーメンバーとして黒紅と刀子と協力関係。ブラドを斃せる唯一の切り札として黒紅を見てる。

ジャンヌ・ダルク・30世

イ・ウーメンバーとして黒紅と刀子と協力関係。超偵を拐う際の移動手段として黒紅の結界をよく使う。

藍幫組

猴こう
(孫そん)

原作と違い黒紅によってキンジと会う前に日本語を習得。

キンジ並みに黒紅も好き。

黒紅と歳の差が唯一小さいヒロイン。

曹操コウコウ姉妹 (狙ジュ姉シユ、炮パオ娘ニヤン、猛メイ妹メイ、機ジー嬢ニヤン)

黒紅が藍幫城に來た時に黒紅からシゴキを受けており、黒紅への呼び方は万武マンブ老師ラオシ、愛弟子アイジシ十侍女シヨシヨというポジションとなる。

狙撃手の狙姉は槍、支援の機嬢は苦無を扱える様になっている。

番外編 其の壱 顔合わせ

イ・ウーに入り1週間が経とうとしていた。その間、刀子にイ・ウーの船内を案内されたりしていた。

イ・ウーの歴代船長の墓地、大理石の間、化石コレクションの部屋など訳の分からない間取りをしているイ・ウーの中で迷わない自信が無かった。

「1週間ずっと私にイ・ウーの中を案内してる訳だが、気分は害さないのか？刀子」

そう。何故か刀子は嫌味ひとつ漏らしてない。物色してる私を見てはニコニコと表情を変えてこない…何なんだ…

「いえ、物色し続ける黒紅さんを見ているだけでとても楽しませて貰ってます」

「私を子供扱いしてないか??」

「子供みたいにはしやいできますよ」

「む…」

自覚が無かった。初めて見る人間の武器ではしやぐ事は認めるが他の事でもはしやいでたのは自分でも意外だった。

「今日は紹介したい人がいるのですが、宜しいですか?」

「ん?まあ部屋ばかりはつまらんしな…会わせてくれるのか?」

「はい。2人とも武ノ神さんに興味を持っていて是非話をしたいと言っていました」

「ほお…」

この私に会いたいとは…物好きな人間よな。

「案内してくれるか?」

「はい。ご案内します」

刀子に案内されるがままイ・ウー内を歩く。少し広めの場所に着くと、既に先客がいた。金髪の小柄な少女、銀髪の背の高い美女と対称的な容姿だった。銀髪美女は少し大きめな剣を持っている。

…あれも聖剣なのだろうか…、派手めな装飾がされてる。

「あ、りゆうりゆうー!!連れてこれたんだー!ありがとねー!」

「その男が教 授を倒した男か？」

金髪少女が明るく此方に手を振り、銀髪美女は確認する様に私の顔を見てくる。

成る程、暗龍からりゆうをとってりゆうりゆうか…。

この銀髪美女…何処かで見た顔してるな…

「はい。新しくイ・ウーに入りました、黒紅さんです」

「武ノ神黒紅だ。まあ可能な限り仲良くしてくれ」

無愛想では悪いと思い、はにかむ様に笑っておく。

「はいはい！峰理子っていうのー！気軽に理子りんって呼んでいいよー？」

にぱーっと笑いながらそう名乗る金髪少女。馬鹿みたいな呼び方を要望してくるが、まあ理子と呼んでおこう。

「私は、ジャンヌ・ダルク30世だ。貴殿の様な強者と出会えた事に感謝を」

無表情にそう言いながら握手を求める銀髪美女。折角なので握手する。

「オルレアンの乙女の末裔に出逢えた事に感謝を。成る程、見た事ある顔と思ったらジャンヌダルク一族だったか」

「…一族…？私の家族にあった事があるのか？」

「ああ、あるとも。もう200年も前か？冥界で少し」

双子とか初代とかと話せたのは面白かった。

「冥界…？武ノ神は面白い事を言うな。冥界は死者の行き着く場所、そもそもあるかどうかも分からない」

「私は冥界から来たんだ。冥界で船を動かしたり鍛冶したりしてた」

ジャンヌは？と首を傾げる。理解出来ないのか…。

「ねえねえー！コー君は本当に神様なのー？厨二病患者じゃないの？」

「吸血鬼と同じ事を言いよる…」

神の存在はそんなに認められんのか？聖女は最期まで信じてたぞおい。というか誰がコー君だよ…こくこうだからか？

「…おい、今なんつった…？」

理子が急に声を低くして聞いてきた。…どうした？ジャンヌも刀子も震えてる様に見える。

「吸血鬼ブラドから同じ事を言われたと言ったのだ」

「あいつに会ったのか!!お前…よく生きてたな…アイツ以上の化け物とか、流石No. 0…教授を超えた存在か…」

「なんか驚いてるな…何だ？ブラドはそんなに強いのか？」

「ブラドはイ・ウーではNo. 2の実力なんだぞ…。武ノ神、どうやって逃げてきたんだ？」

「あれでNo. 2とかシャーロックと実力差があり過ぎなのでは??？」

「大した事じゃないさ。居合で一刀両断、上下に分けて動けなくしてやったんだ。ブラドの娘が来たが、色々下準備したくて逃げてきた」
「事実を説明してやると、3人が呆けた顔をして固まってしまった。」

「…一刀両断…い、一体どんな名剣で斬ったのだ?!あの大きさ、お前の身長以上必要だろう!」

「いや、刃渡り70の日本刀を模した銃剣さ。長さが足りないなら早く振れば良い。鎌鼬が斬ってくれるさ」

「……??？」

混乱した様にジャンヌは頭を抱えてしまった。

「……ブラドを…斬ったのか？」

「しつこいな…あの時は人間界に来て直ぐだったからな。作り替えた人間の体が慣れてたら、輪切りで5個にしてやったものの…」

「……ブラドの……輪切り……ぷっ、あはははははは!!ブラドが輪切り!!最っ高に笑える!!今度会った時その話を振ったらどうなるかなあ!!あははははははは!」

お腹を抑えてくの字に曲がる理子。親の仇か何かか?凄く笑う。

ジャンヌは早口で何か呟いている。途中から

「J e n e c o m p r e n d s p a s」ばかり言ってる。

「黒紅さん。事実でも伝えるべきでは無いかと…」

「どうやらそうみたいだな…理子。ジャンヌ。今のは他言無用で頼めるか?」

「ええー、どうしよつかなー。理子りんはあー、口約束じゃ守れないか

もおーくふっ」

甘ったるい声に戻って体をくねくねしてる。…何か欲しいのか？

「仕方ない。お前が何か望むならそれを叶えてやろう」

「それってー。どんなのでもいいのー？」

「ああ。人殺しはNGな。元々死者を少なくする為にこの世界に来たから」

「ふうーん……」

何か悩む様にクルクル回ってる。ジャンヌはまだ頭を抱えて沼に嵌ってたので刀子が介抱していた。

「じゃあさあ！理子の両親に会わせてよ！冥界が本当にあるなら、そういうのも出来るよね？」

回るのをやめてズビシッ！と私に指差してきた。

「理子ちゃん、それは黒紅さんでも……」

「出来るぞ？」

「え？」「はえ？」

驚いた顔で此方をみる3人。お前ら私の言葉で驚き過ぎた。

「死者面会は可能だ。理子、お前の家族を言え。ファミリーネームでも良い」

「え……えと……リユパンだけど……」

リユパン……？フランスの大怪盗アルセーヌ・リユパンの事か。

此処は有名人の子孫や本人が多くいるみたいだな。

「リユパン家だな。よし」

肩マントの裏に手を伸ばし、異空間からロックシードを取る。

赤いブドウの中に地獄の業火がある様な模様のロックシードだ。

「…武ノ神、それは一体何なのだ？」

ジャンヌが不思議そうにロックシードを見る。

「ヨモツヘグリロックシード。冥界と此方の世界を繋げる鍵だ。

知らんか？イザナミ様が黄泉の世界の物を食べた所為で黄泉から離れられないという話。その食べ物がヨモツヘグリだ。こいつが葡萄の形をしているのは、イザナギ様が黄泉の世界から逃げる際、葡萄を植え付け八雷神^{やぐさのいかづちがみ}を足止めして、その葡萄が残ったからと言われ

ている」

「…日本神話のイザナギとイザナミ…ですか？」

「その通り。まあ長話になってしまいうからさっさとやるか」

そう言いながらヨモツヘグリロックシードを解錠する。

目の前に金色のクラックが開き、冷たい空気が流れ込んでくる。

そう言えば冥界の気温、人間界より幾らか低いんだったか？

「…あ…」

理子が小さく声を出す。理子の目の先には、夫婦が1組立っていた。

「…お父様……お母様あ!!!」

叫びながらクラックを通り、夫婦へと抱きつく。

「お母様あ……お母様ああ!!!理子……理子頑張ったよおお!!!」

ボロボロと涙を零し、顔を埋める理子。その理子の頭を、2人が撫でていた。

「…驚いたな…これが本当の冥界か…しかし、何故リュパン家である理子のご両親はこの場に？フランスに住んでいたのだろうか？」

「ああ、今冥界はフランスのリュパン家の座標にある。

冥界と天界は、地球と変わらぬ広さだな。死者が死後も同じ家に住みたいという時は大体同じ座標に家を建てるんだ」

「…では…私の一族もいるのか？」

「会いたいのか？一度閉めなければいけないが」

「……いや…私は良い。その気になったら、頼もう」

「分かった。では理子の気が済むまで、このまま待つか」

あの後理子は2時間ほど両親と話し込み、戻ってきた。

「…もう良いのか？永く会っていないなかったのだから？」

「…確かに、理子が8歳の頃にお母様とお父様は死んでしまわれた…けどもう良いの。伝えたい事はもう伝えられたから」

「……そうか。では閉じるぞ」

ロックシールドを錠を閉じ、クラックを閉じ始める。理子は振り返り、クラックに向かって叫んだ。

「お母様あーお父様あー理子はあー愛してまあす！」

声は届いたのか、クラックが閉じる瞬間2人は此方に手を振っていた。

そして完全にクラックが閉じ、冷たい空気も無くなっていった。

「……さて！こー君が本物の神様なのは分かったから、もっと違うのが知りたーい！」

「切り替えが早いな理子。そういう人間は良い選択肢を間違えず選べて幸福度が高いぞ」

「くっふふー!!理子りんはあー!凄いい子なのです!リュパン家の末裔だもんねー!」

直接的な繋がりは無いが、まあ修正しないでおこう。

「…私としては、武ノ神と手合わせしたいな」

「あ!理子もやるー!!!りゅうりゅうもやるー!」

「えっ?…:私は…遠慮しときたいというか…:その…」

「別にあの装備ではやらんよ。フェアじゃなさ過ぎるからな
神器と戦うとか3人でも可哀想だしな。」

「ああいえ!違うのです!私黒紅さんの持ち物と似た様な物があるの
で、それで手合わせしたいと思っただのですが…:そんなに期待出来な
いかと…」

「何!?!刀子それは本当か!!」

「ひゃい!?!」

刀子の両肩を掴み向き合わせる。

「お前のその力が知りたい!!!直ぐに用意出来るか!」

「は……はいいい……」

刀子は顔を赤らめて慌ててる感じだった。：あ、男は苦手だったかな……いや、1週間しか一緒になってない男が近過ぎて恥ずかしいのか？

「……すまんな刀子、柄にもなく興奮してしまった。それで、直ぐに手合わせの準備は出来るのか？」

「は、はい！ジャンヌちゃんに協力して貰いますが……」

「私はいつでも良いぞ」

「ふむ……では直ぐ始めさせて貰おうか」

番外編 其の式 手合わせ

刀子に私の力と似た様な物を持っているという事で、直ぐに手合わせの準備をする様に頼んだ。

ジャンヌと刀子は理科の前に出て、三角形の様な配置に立つ。

理子は二丁拳銃、ジャンヌは剣を使うそうだが…刀子は何だろうか。

「ジャンヌちゃん、氷をお願い」

「ああ」

ジャンヌが剣先から冷気を出し、刀子の前の地面に氷を貼った。

鏡みたいに綺麗に刀子を映していた。

刀子は懐から長方形の何かを取り出し、鏡の様な氷に映させてた。

すると、刀子の腹にベルト「Vバックル」変身者が自身の姿が映る鏡面の前に立ち、カードデッキをかざすことで鏡面の中から実体化して腰に装着される。が装着された。

「……何だそれは」

「これは私の父が遺したものです。父は知らぬ人間からこれを受け取り、戦ってきたと言っていました。今は私が契約主という事になっています」

「契約…?」

「見て下さい。私の変身」

そう言った刀子は、そのカードデッキをベルトに差し込む。

ベルトの上部の赤いランプが光り、音を鳴らす。

鎧の様な黒い影が重なり、気づけば刀子は黒い騎士の様な姿になっていた。

「……仮面ライダー龍牙^{リュウガ}。それがこの姿の名前です」

頭に龍の顔の様なシンバルマーク。全身は黒に染まっていて、目に当たる部分は赤く光っている。全身は簡素なスーツで、左腕に龍の顔

の様な装置がある。

「ほお……面白い」

戦極ドライバーを装着し、私も準備をする。

「変身」『ブラッドオレンジ！』

『ロック オン！』

ブラッドオレンジをセットし、ロックする。折角なので変身ポーズを付け加えよう。

右腕を天に向けて伸ばし、開いた手を拳に変える。ゆっくり拳のま下に下ろして腕を交差し、両腕を広げる際に左手でブレードの上部を押し込む。

『ブラッドオレンジアームズ！』

邪ノ道オンステージ！』

ブラッドオレンジアーマーが展開して、鎧へと変わり、果汁のエフェクトが飛び散る。

「なら私は仮面ライダー**武神鎧武**、と言った所か」

右手に持つ大橙丸の峰を左手に添えて構える。

リュウガはベルトからカードを取り出し、左腕ブラッドドラッグバイザーの装置仮面ライダーリュウガの左腕に装着されている、ガントレット型の召喚機で、契約モンスターのドラッグブロッカーをイメージする漆黒の外見となっている。上部カバーを開くと現れるカードスロットに、カードデッキから取り出したアドベントカードを装填し読み込ませることで、アドベントカードに応じた能力を発動できる。

に挿入してスライドする。

『ソードベント』

リュウガの上空の何も無い空間から剣が降ってきて、リュウガがそれをキャッチする。青竜刀に似た様な武器、ドラグセイバードドラッグブロッカーの尻尾の形をした剣型の武器。攻撃力を表す数値、APは3000。を持って此方に刃を向ける。

「……はああー」

まず先に此方から動き、リュウガに斬りかかる。
ドラグセイバーでガードして、鏢迫り合いになる。互いに離し、ぶつける。弾かれて時計回り、反時計回りして互いの胴体に刃をぶつける。

火花が散って、互いに距離を取る。

「私達を忘れては困るな！」

リュウガの横から氷の塊が、後ろから銃弾が飛んで来た。大橙丸を傾けて銃弾を弾き、氷の塊は振り下ろして斬る。

「はああ！」

ジャンヌが地面を蹴って此方に近づく。大橙丸でジャンヌの剣技をガードするが、大橙丸との大きさの差で此方が大きく弾かれてしまう。

「ちい…武器の相性が悪いか…」

「デュランダルを防ぐか。だが私の聖剣に切れぬものは無い！」

お前の刀がいつまで持つか、私の聖剣の相手になるか試してやる！」

「はっ！其の自信を打ち砕かれぬ様にしろよ!!」

デュランダルからの猛撃を大橙丸でガードする。

相変わらず弾かれてばかりだが、いつまでもそういう訳ではない。

大きく持ち上げ振り下ろしてきたタイミングで大橙丸でガードの姿勢。

デュランダルなら斬れると思ったのかニツと口を歪めて振り下ろすジャンヌ。

デュランダルが大橙丸にぶつかり、割って私に届くと思わせた所で大橙丸を斜めに傾けて滑らせる。

デュランダルが床に突き刺さる。ハツとしたジャンヌだがもう遅い。

ジャンヌの体で唯一鎧で守られてる胸部に向けて蹴りをする。

聖剣を手放して吹っ飛ぶジャンヌ。入れ替わる様にリュウガが前に出て、理子はジャンヌをキャッチする。

「やああー！」

ドラグセイバーで斬りかかる所を大橙丸で腹部を斬る。

「ううっ！」

後ろに転がり、膝立ち状態になるリュウガ。ドラグセイバーを左手に持ってベルトからカードを出す。

『ストライクベント』

リュウガの右手に龍の頭ドラグクロウドラグブラッカーの頭部の形をした手甲型の打撃武器。ブラックドラグバイザーのカードスロットにストライクベント（リュウガ）を装填し読み込ませると召喚され、リュウガの右腕に装着される。攻撃力を表す数値、APは3000。ドラグクローを標的に向けて構えることで、召喚されたドラグブラッカーが火球を浴びせる必殺技「ドラグクローファイヤー」を発動できる。が装備され、その口から黒い炎球が発射される。

「ぐっ……ぬああー！」

まともに炎を喰らい、吹っ飛ぶ。

「……やるな……。ならば！」

大橙丸を左手に持ち、無双セイバーの反対側に設置してあるロックシールドホルダーからヨモツヘグリロックシールドを取ろうとすると、後ろからヨモツヘグリを掠め取られる。同時に右手を攻撃された。

「なっ!？」

理子が後ろからヨモツヘグリを取り、リュウガの隣に立つ。

「駄目だよー！大事な武器なのに剥き出し保管してちゃー！直ぐ取られちゃうぞお！」

「……おのれ……峰理子……」

「理子りんはあ、泥棒さんなのです!!」

だからあ、大事な物は漏れなく理子りんが盗んじやいます！」

成る程。この3人の組み合わせは存外厄介な物だったか。

既にジャンヌは起き上がり、デュランダルを持ち直し、構えてる。

理子は何かの力で髪を動かし、2本のナイフを装備している。

リュウガはまたカードを取り出してスキャンしてる。

『アドベント』

氷の塊から黒い龍が現れ、私にぶつかつた。

「ぐはっ！」

黒い龍はリュウガの周りに浮かんで、此方に牙を向ける。

「ドラグブラツカー。それがこの子の名前です」

「…ふははは！龍の使い手か！相手に取つて不足なし！」

「そろそろ終わりにしよーよーコー君。」

もう使える手がないんでしょ？」

お前が盗んだからだけだな。だがまだロックシードを作つてないから戦略が少ないのも事実。潜水艦だからフルーツを仕入れようと思つても上手くいかない。

「…ああそうだな。終わりにしよう」

そう言いながら無双セイバーを抜刀し、大橙丸と合体させナギナタモードにする。

『ロックオフ』

戦極ドライバーからロックシードを外し、無双セイバーに取り付ける。

リュウガも切り札の様なカードを取り出してる。

ジャンヌは周りにダイヤモンドダストを作りながら、デュランダルを青白く発光させている。

『ファイナルベント』

『ロックオン！ー！十！百！千！万！』

リュウガが浮遊し、ドラグブラツカーが周りを飛び回りながら黒い炎を口から出そうとしている。

私はナギナタの無双セイバー側と大橙丸側の刃にエネルギーを溜めて構える。

ジャンヌはデュランダルを頭の上に掲げて、理子は此方に向かって走る準備をしている。

「銀氷となって散れ！」
『Fleur de la glace d'Orleans オルレアンの氷花』!!!」

「はあああつ!!!!」

「はあああああああ!!!!」

『ブラッドオレンジチャージ!』

ドラグブラツカーから放たれた黒い炎を全身に纏い、飛び蹴りの姿勢になって飛んでくるリュウガ。

デュランダルを左上から右下に振り下ろし、レーザービームの様な青白い光を此方に放つジャンヌ。

リュウガの横を少し遅れて走り、髪で掴んでるナイフを前に伸ばしながら両手の銃で乱射する理子。

だが私はその全てを断ち切る。

右から左へナギナタを払い、前方のリュウガと後方のジャンヌの砲撃に無双セイバー側のと大橙丸側のエネルギー刃を飛ばす。

その勢いで後ろに向き、今度は前方になったジャンヌの砲撃と後方になったリュウガに2本のエネルギー刃を飛ばす。

今度は左から右に回り、デュランダルと理子の銃弾を弾き上げる様に2本のエネルギー刃を飛ばす。

ジャンヌの攻撃に3本、リュウガに2本、理子に1本。
一振りで前後に2本飛ばしている。

ズガアアアアン!!!!ドガアアアアアン!!!!

ジャンヌの砲撃とリュウガのライダーキックとエネルギー刃がぶ

つかり、大きな爆発となった。

「あああつ!!」

「ぬあつ!」

「うあつ!」

「ぬうう!!」

爆風がこの場にいる全員に襲いかかる。爆煙が晴れる途中で、ドサツ!カランカラン!パキン!カラン!

リュウガがライダーキックに失敗し床に落ちる音。

理子の銃弾とナイフが落ちる音。

デュランダルの剣先が割れ、地面に落ちる音。

そう、彼女達全員の攻撃を防ぐ事に成功したのだ。

「うううっ……」

リュウガが強制変身解除され、刀子に戻る。

「……私の……聖剣が……」

剣先とは言え、割れてしまったデュランダルの見るジャンヌ。

「……くそ……!化け物かよ……!!」

ナイフを装備していたツインテールを斬られて、低い声で憤怒する理子。

だが当然無事である訳ではなく。

バキイイイン!!!!

と派手な音を立てて、無双セイバーナギナタモードは両方の刃が盛大に折れてしまった。

一振りですぐ二本エネルギー刃を飛ばす技を連続3回やったから、刃が耐えられなかったのだろう。

持ち手の部分は無事だったので、ブラッドオレンジロックシードを

外し、回収する。

『ロック オフ』

ドライバーにセットし、フルーツ部分を閉じて変身解除する。

「…いやはや。これはどう勝敗を付けようか」

そう、潜水艦に穴を開けそうな程白熱していた訳だが、これは手合わせである。勝敗はどちらになるのか。

「……私は負けでいいよ。銃弾だけでなくジャンヌのあの砲撃を斬れる奴がいてたまるかよ」

「…私も負けでいい。斬れる物は無いと言われた聖剣アユランダルがお前の剣を斬れずに、更に破壊されるとなれば勝ったとは言い難い」
理子とジャンヌは直ぐ答え、負けを認めた。

刀子は床に落ちた後、返事が無い。

「…刀子。お前は どうする。私の勝ちで良いのか？」

「……ライダーの必殺技がぶつかり合う場合、先に強制変身解除された方が負けなのです…」

「そうなのか？」

「はい。…なので」

刀子は上半身を起き上げ、此方に顔を向ける。

「…完敗です。勝利は貴方の物です。黒紅様」

どうやら私の勝ちで宜しいとの事だ。まあ全員が納得しているならそれでいいが……ん？

「……今何と？」

「だから黒紅様の勝利ですと」

「待て待て待て。待て。お前始まる前まで黒紅さんだっただろ？」

「はい。間違いありません黒紅様」

「…ええ…?？」

第壹章 武偵殺し編 装填 準備段階

時は流れて2009年……

私、武ノ神黒紅は朝6時に起床しヘルヘイムで鍛錬している。

鍛錬内容は人間の武器の使用だ。ロックシードを使った鍛錬の様子見たい奴はまた今度な。……いかん、読者向けに話してしまった。

自分で打った刀、あかつき紅月と44オートマグとかいう銃だ。

鍛冶の仕事柄、武器は触れば6割理解。振るえば3割理解。納めて全て理解出来るのだが、この銃は他のと違い、理解までが早かった。気に入られた様で命中率は他と桁違いだ。

オートマグという銃は世界初のマグナム弾を使用する片手銃で、マグナム弾とはライフルと同等という高威力な物らしい。これを使うのは猟銃かライフル銃が多く、この44オートマグは改良された後継機との事だ。

紅月は武偵になってから初めて打った刀だ。黒紅の紅と、月のクレーターみたいな模様になった為^レに紅月にした。

これを使って弾丸や両手銃を斬ったりしてきた。「お父様の仲間の剣豪かよ……」なんて事を理子に言われたな。

済まん。弾丸を斬るなど私には野菜を切ると変わらんよ。

閑話休題。

今現在この東京武偵高校第三男子寮に住む私は、とある男と相部屋になっている。刀子？流石に女子寮に行ってるよ。婚約者でも相部屋は許されなかったよ。

相部屋の相手は遠山金四郎の子孫が1人、遠山キンジ金次だ。

入学式には出会わなかったが、一年同じ学科で過ごして仲の良い友となった。理子はイ・ウーの時から良き友人になってくれているからなんか新鮮だった。今じゃキンジの武装整備したり、キンジと一緒に依頼を受けてやる事もある。勿論キンジだけでなく、理子と刀子と一緒に依頼を受けるが、キンジが女子嫌いなんで大抵男2人で任務だ。あと武藤とかいう騎乗の天才と不知火とかいう何か隠してる優男がいるな。正直不知火は嫌いだ、友達の友達感覚。その点武藤は面白い。グラビア写真集とか一緒に見てというのが刀子に合うか意見を言い合う時とか楽しいぞ。

まあ刀子を狙おうとするなら首が飛ぶがな。変態に慈悲は無い。というかあいつ含めて武偵男子共はモテたい一心が強いよな：嫌いじゃない。(好きとは言っていない)

一通り鍛錬を終わらせ、シャワーを浴びる。汗を拭いて制服を着れば丁度7時。玄関のチャイムが慎ましく鳴り響く。

ドアの覗き穴から見れば、大和撫子の具現化といえる星伽ほとぎしらゆき白雪が、想い人の為に前髪を整えてる。純白のブラウスと臙脂色の襟とスカートという武偵高の制服を着ている。生徒会長兼園芸部部长兼手芸部部长兼女子バレー部部长の偏差値75の超人的存在だ。そして超能力操^S作研究^R超能力・超心理学による犯罪捜査研究を行っている学科。日本各地の霊場で合宿を行う事もある。サイコメトリーやダウジングといった超能力捜査がメインであるが、中には攻撃的な超能力をもつ人間もいるらしい。武偵高でも特に秘密主義が徹底されている専門科で、関係者以外で詳細を知る者は少ない。に所属している。

そんな奴が男子寮に来る理由はただ一つ。幼馴染であり家柄的に昔から補佐をしている遠山家のキンジを起こしに来たのだろう。

星伽は武装巫女、武器を扱える巫女だそう。初見一発で私が神という事がバレた。いや巫女だからそれは当たり前か……だが有難い事に他言無用にしてくれている。遠山も身近な友人達が巫女と神ワ

ンセットで出現とか頭痛くなるだろうしな。

「白雪。開けるぞ」

「あ、はい！」

ささつとコンパクトミラーを仕舞う白雪。玄関のドアを開けると、白雪が二つ和布を持っていた。：形からして重箱2人分があるので、朝食の準備が必要なくなったな。因みにロングスカートにしないのかと聞いてみたら

「男の子はスカートが短いとそこを見ちゃうって聞くので：キンちゃんに見られたいなって：」と顔を赤くして言われてしまった。一途よな…

「悪いな、遠山でなくて。奴は寝坊助だからまだベッドの中にいるんだ」

「と、とんでもないです！御神が出迎えてくれたのに残念と思うなんて失礼です！」

「そうかい。それじゃ上がりなよ。今なら遠山の寝顔見れるかもな」
「キンちゃんの…寝顔…！」

犯罪者予備軍になりそうな顔に一瞬なった後、キリツとして玄関に入る白雪。キンジとは幼馴染で、小さい頃から家の繋がりで神社で遊んでたらしい。星伽の掟を破って外に出た事もあるそう。星伽巫女は基本外に出てはいけないという規則があるのは冥界でも聞いたことがある。星伽の神が『ウチの巫女を連れ出すガキがいるんだけどさ：、星伽と仲良しの遠山家の子だから呪ったり出来ないからさ、不幸にしてやろうと思うんだ』とか言ってたな。酒の席で。アレはキンジの事だと気づいたのは一年前である。

それも十分呪いの類いという事を教えてやれば良かったかな。私情で呪ったりすると神主を変えられるとかあった気がするが…

そんな事を考えながら私は寝室に入り、キンジを起こす為に肩を叩く。

「ほれキンジ。星伽が来てくれたぞ。着替えて朝飯にしようぜ」

「…ああ…入学式か今日は…今年は単位不足になったら大変だな…」

そう言いながらベッドから起き上がるキンジ。「キンちゃんの寝起き姿……！見たい……！」とか聞こえるが無視しよう。というかお前トランクス1枚で寝てたのか。風邪引くぞ。

「安心しろ。俺の任務に連れ回して単位贈呈してやるから」

「悪いな黒紅。宜しくな」

「そういう契約だからな」

この会話がどういう事か星伽も知っている。彼は武偵を辞めるのだ。辞めるまで私が守ってやるという契約をあの日に交わしたのだ。「今日は始業式だ。星伽がお前の為に朝食を用意してくれてるからさっさと着替えろよ」

「分かった」

キンジの返事を聞いて、私はテーブルにつく。

白雪が重箱を一つ出して、テーブルの上に置いてくれる。

「どうぞ。口に合うと良いんですが……」

「いやいや、お前の作る飯は極上の品に匹敵するさ。自信を持ちなよ」

「は、はいー」

一年生の頃から白雪がキンジの為に用意して、一緒に食べるのが普通になってきている。

朝から重箱用意してくれる奴は普通じゃないとか言っではいけない。言っではいけないのだ（戒め）。

「昨日は伊勢神宮に合宿だった筈だろ？これを用意するのに大分早起きしたんじゃないか？」

「は、はい！でも、それでキンちゃんのお世話何にもできなかったから……せめてと思っ……」

健気だなあ……キンジにアレが無ければ既に好意を読み取って付き合っただろうに……

そう考えながらふんわり柔らかい卵焼きを食べると、軽く制服を着てきたキンジが座卓に腰をかける。

「おはようキンちゃん！」

「おはよう白雪。というかその呼び方はやめろって言っただろ……」

「あつ……ごっつ、ごめんね。でも私……キンちゃんの事考えてたから、キ

ンちゃんを見たらつい、あつ、私またキンちゃんって……ご、ごめんね、ごめんねキンちゃん、あつ」

円満の笑みから蒼白になる白雪の顔。キンジに惚れてるが故に不快にさせたと自己嫌悪に陥って可哀想である…

「あまり虐めるなよキンジ。癖は直せないんだ、諦めろ」

「こっちは恥ずかしいんだよ…昔の渾名で呼ばれるのは…」

「今更それで揶揄われる訳でも無いだろ？ほら、白雪がお前の為に朝食を用意したんだ。さっさと食べる」

「お前にも作ってるんだから俺の為な訳ないだろ？」

キョトンとした顔で言っただけのこの小童…百面相の如く喜と哀の表情が入れ替わる白雪が本当に不憫である。そしてそのキンジは白雪を見ずに重箱に箸を伸ばし、口に運ぶ。小魚の骨でも刺されれば良いのに…

一口食べた後、キンジが白雪に向き直って目を見る。

「…えつと、いつもありがとな」

「えつ。あ、キンちゃんもありがとう…ありがとうございますっ」

「なんでお前がありがとうなんだよ。ていうか三つ指つくな。土下座してるみたいだぞ」

「だ、だって、キンちゃんが食べてくれて、お礼を言ってくれたから……」

おどおどしながらキンジに三つ指ついてる白雪。その白雪を見て顔を赤くしたキンジ。ああ…下着でも見えたのかな？良かったなキンジ（良くない）。

数分経ち、朝食を食べ終えたので気になった事を聞いてみる。

「キンジ。入学式だからと言ってまさか武装しないで学校行くつもりか？」

「……なんで分かった…」

凶星か。本当にこの男は……武偵を辞めると決めてから日に日に警戒を疎かにしてるな…

テキパキ重箱を片付けた白雪が武偵高の学ランを取って羽織らせる。着せ方が夫婦のそれだったので後で揶揄ってやろう。

「ホルスター付けないで飯食ってたからな。銃を入れとけとは言わんが少々不用心だぞ？校則にもあるんだぞ。『武偵高の生徒は、学内での拳銃と刀剣の形態を義務づける』ってな」

「そうだよキンちゃん、『武偵殺し』^{ぶていごろう}みたいなのが出るかもしれないし…」

そう言いながらテレビの脇に放り投げられてた拳銃を持って、両膝をついてキンジのベルトにホルスターごと帯銃させる。

「『武偵殺し』？あれは逮捕されたんだろ？」

「残念ながら、再び動く可能性は高いだろうな」

「…何だって？」

興味を示したキンジが私に顔を向ける。…まあ少し話しても奴の計画に支障は出ないだろう…

「キンジの言う通り武偵殺しは逮捕された事になっているが…調べた結果、逮捕前日まで普通の主婦だった女性を逮捕していたんだ」

「な…!!何でそんな事が…!」

「懲役1000年近い実刑だからな。大規模な組織の罪をなすりつけられてるんだろうな。勿論それだけとは思えないが…」

「…そんなの…許されないだろ!」

テーブルを叩いて珍しく怒りを表すキンジ。事情が事情だからだろうが、ここまで怒るのは奴の血の影響かな…?

「兎も角だ。武装はしておけ。内申点下げられたら困るのはお前だろ？」

「それに、今朝の占いで、キンちゃん、女難の相が出たし。キンちゃんの身に何かあったら私…私…私…ぐす…」

あーあ。涙目になっちゃった。ジト目でキンジを見て煽ってやると…

「分かった分かった。ほら、これで安心だろ。だから泣くなって」

溜息をついて、棚からバタフライナイフを取り出してポケットに収める。

私は小太刀とかでも良いのではと提案した事があったが、まあ形見だしな……今も言うのは野暮だろう。

「……キンちゃん。カッコいい。やっぱり先祖代々の『正義の味方』って感じだよ」

「やめてくれよ——ガキじゃあるまいし」

うっとり眺めてた白雪に対し吐き捨てるようにそう言うキンジ。キンジの言葉に返事せず、白雪は黒い名札をキンジの胸につけてやる。

そういえば4月は生徒全員が付けなきやいけないんだったな。

私は自分で名札をつける。

「俺はメールをチェックしてから出る。白雪は先に行ってるよ」

「あつ、じゃあ、その間にお洗濯とかお皿洗いとか——」

「それは俺がやるから行きなよ星伽。俺はキンジの警護も含めて残る必要があるから」

「……は、はい。じゃあ……その。後でメールとか……くれると、嬉しいですっ」

白雪はもじもじとそう言って深くお辞儀をしてから部屋を出て行った。

それを見届けたキンジはどっかりとPCの前に座り、メールを見始める。

私はそれを見た後にキンジの部屋から離れ、ベランダに出る。

そして携帯電話からとある番号に掛かる。

「……私だ。お前の計画通り、自転車に爆弾を仕掛ける。俺はキンジを置いていけば良いんだよな?……分かった。『オルメス』と組み合わせる様にキンジを説得しておく」

第壹弾 計画実行

「……あの馬鹿、いつになったら気づくかねえ……」

やあ、武ノ神黒紅だ。

現在私は7：58発の一本前の武偵高行きバスに乗って学校に向かっている途中だ。

メール確認からネットサーフィンに走ったキンジを置いてきた。警護？今日は休みだ。アイツには奴の計画に乗ってもらわないと困るからな。

さて、無事に学校に着いた私は教室に入ってクラスメイトに視認してもらおう。その後直ぐ教室を出て、誰も居ない事を確認してクラックを開ける。

結界に入ったらすぐさま閉めて、男子寮に繋ぐ道を開ける。

電話用インカムを耳に、ドライバーをセットしてロックシードを持ったら準備完了だ。

「さて、始めようか」

『ブラッドオレンジ！』

頭上に赤い光が何本も集まって、ブラッドオレンジアームズを形作る。

ドライバーにセットしてロックオン。カッティングブレードに左手を添える。

「変身」

『ブラッドオレンジアームズ！』

邪ノ道オンステージ！』

歩きながら武神鎧武に変身し、結界から出てわざと監視カメラに映る様に歩く。

そしてキンジの自転車を探す様に彷徨き、見つけてサドルの裏に爆弾を仕掛け、

周りを見渡す。

時計を確認すると、7：55。

「キンジが出るのを待つか…」

寮の玄関の隅に移動して少し待つと、玄関から出て駐輪場に向かうキンジが現れた。

「黒紅の奴…バスに遅れる事くらい教えてくれれば良いのにいなくなりやがって…」

案の定自転車を持って寮を出て、自転車に乗り車道へ行く。

奴にキンジが動いたとメッセージを送ると、数分でUZIを乗せたセグウェイがキンジを追いかける為に走る。

それを見届けた私はロックビークル《サクラハリケーン》ロックビークルの一種であり、アーマードライダー専用のバイク。走行中に空間の裂け目を発生させ、ヘルヘイムの森へと移動することが可能。ビークルモードからロックモードへの変形により、ロックシードと同サイズにまで縮小することができる。を取り出して解錠、バイクとなったそれに乗り、キンジに悟られない様に距離を空けてUZIの後ろを走る。

『ねーコー君、理子りんの作戦を見届ける必要あるのー？』

バイクを走らせて30秒程、電話用のインカムから武偵殺し理子の声が聞こえてくる。

「言っただろう。私がこの世界に来たのは死者の削減だとな。」

万が一…億が一にもキンジが死にそうになったら助けてやる。オルメスが救助するとは思いが念の為だ」

『むうー。理子りんの作戦は完璧だよ！邪魔したらぶんぶんがおーだぞー！』

「そいつは勘弁だな」

そんな会話しながら周りを見渡す。万が一を考えて第二グラウンドに向かっている所を考えると、キンジなりによく考えてはいるがまだまだ甘いな。

人気のない所に行くという事は味方もいないという事。

被害者がいなくなると考えればそれもいいかも知れんが、武偵なのだから爆弾の一つや二つ解体するのも容易いだろう。

UZIは狙撃科スナイプ狙撃、観測といった遠隔からの戦闘支援を習得する学科。狙撃は極めて高い集中力を必要とするため、性格的な向き・不向きに左右される傾向が強く、適性のある強襲科の生徒に転科をうながすこともあるようだ。と強襲科アサルト拳銃・刀剣その他の武器を用いた近接戦による強襲逮捕を習得する学科。日常的に激しい戦闘訓練があり、犯罪組織のアジトに突入する依頼が来るなど、他の学科と比較して、危険度は高い。卒業時の生存率が97・1%と、約3%の生徒が死亡するため、「明日無き学科」とも呼ばれる。で破壊し、爆弾解体は車両科ロジ武偵活動における車輛・船舶・航空機の運転操縦、整備を習得する学科。車輛科に在籍していると、取得可能な年齢に達していなくても運転免許を取得できるメリットがあるため、それ目当てで入学してくる学生も存在する。からバイク用のランニングマシンなんか借りて走らせながら諜報科ザド特殊工作員を養成する学科。敵地に潜入しての情報収集、破壊工作方法などを学ぶ。学内での異変について、調査レポートを作成することもあるが、ガセが多いことでも有名である。かだれかがやれば良いのに。

『あ、助けを呼んだら爆発するって脅してるからガチでアリアしか来ないよー?』

「鬼か貴様は。……いや、呼べる状態にしたらオルメスの出番がなくなるか…」

『そゆことー』

そろそろオルメスがキンジを助けると思うが…どう助けるつもりなのかと考えると

「……見つけた」

女子寮の屋上にピンクの髪色をしてるツインテール少女が柵に立ってる。

聞いた情報と写真からしてあれがオルメス…シャーロックホームズ四世神崎・H・アリアなのだろう。

「しかし一体何をするつもりだ?」

そう思った先、オルメスがフラツと落ちていった。武神鎧武の視覚センサー《パルプアイ》視覚センサー部。無数の小さなカメラアイが放射状に配置されており、人間の視覚出来る範囲を大幅に超えてとらえることが出来る。には、オルメスが虚空に落ちながらパラグライダーを広げた事が確認出来た。

「マジか」

そのままオルメスは銀と黒の大型拳銃でセグウェイを撃ち、銃座と車輪を破壊させた。

「…成る程。芸達者な奴だな」

そのままキンジの頭を踏みつけ、上昇をする。また急降下してUターン、逆さ吊りになってキンジへと近づいている。

「…成る程。そう来たか」

そのままオルメスはキンジを救い出す。キンジの自転車は木っ端微塵に爆発した。

「少々火力過多じゃないのか？量も計算した結果か？」

『理子りんの計算はバッチグーなのです！心配事なんてー、ナツシングー！』

電話の向こうでドヤ顔になっている理子が想像出来る。

「……まあ良いか。この調子ならキンジもあの力が発揮されてるだろうよ。私は帰るとしよう」

『あいあーいー！後は理子りんにまっかせてー！』

電話を切り、私はバイクを走らせて結界を開く。そのまま入ってバイクで突っ切る。後はバイクから飛び降りてロックビークルを回収し、学校の始業式に紛れ込む。

さて、奴らはちゃんと生きてるかねえ？

第貳弾 逆鱗抵触

始業式に間に合わなかったキンジは、疲れ果てた社畜の様な足取りで教室にやってきた。

俺に見捨てられてバスに遅刻、自転車で間に合わせようとしてもまさかのチャリジャック。

アリアによる救出の後に自動走行セグウェイ（UZIを添えて）による銃撃だ。無理もない。

「ようキンジ。始業式に出れないなんて何かあったか？」

「黒紅……お前、俺の護衛の仕事はどうした！」

恨みを込めた視線を俺に向けるキンジ。

「言った筈だぞキンジ、お前は少々不用心だとな。守つてやるとは言ったがお前が弱くなつては困る。」

護衛の人間が安全確認でいなくなった場合に備えてわざと突き放したんだ」

「だとしても、武偵憲章2条の『依頼人との契約は絶対守れ』を破つてることになるだろ?!」

絶対言うと思つた。だがキンジよ、大事なことを忘れているな。

「無事卒業出来るまで守るといったが、お前が腑抜けになるのは別問題だ。武偵憲章を出すのなら4条の『武偵は自立せよ。要請無き手出しは無用』はどうなる。自立できるといえるのか？」

「そ、それは……」

言葉に詰まるキンジ。論点のすり替えとなるがキンジの現状は俺に依存気味だし、今回の事件は要請が『出来ない』状況だったとは言え『しなかった』事に変わりはない。

「兎も角、何があつたかわからんがお前にも落ち度はある。そんなことでは目的は達成できないぞ」

「…分かつたよ……その…悪かつたな。お前に当たつて……」

「気にするな。ほら、席に座ろう」

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

さて、教師（高天原だったか？）が「うふふ。じゃあ去年の3学期から転入してきたカーワイイ子から自己紹介してもらっちゃいますよー」という前置きにより察してはいたが、キンジの死角の席にいた事によりアリアの存在にやつと気付いたキンジは、椅子からずりつと転げ落ちていた。お前同じクラスなの初めて気づいただろ。

「な、なんでだよ……いー」

そう呟くキンジ。余程驚いてる様だ。

「よ……良かったなキンジ！なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！先生！オレ、転入生と席代わりますよー！」

満面の笑みで立ち上がるキンジの右隣の武藤剛氣。むとうごうき

キンジの親友とも呼べる存在で、こいつがスクーターからロケットまで乗りこなす天才騎手だ。身長190間近らしい。「馬車も馬も法律では乗り物だが乗れるのか？」と聞いてみたら「実物に乗るまで分らんが、何とかなるだろ」と言い返された。これが天才……いや、若さか……。

因みに性格がガサツなため、女性にはまったくモテない。

言い忘れてたな、俺はキンジの左前の席だ。

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねえー。じゃあ武藤くん、席を代わってあげて」

明らかに男女の恋仲と勘違いした教師はアリアとキンジを交互に見て、武藤の提案を許可した。教室は拍手喝采になったので便乗しようと思う。というか煽ろう（謎の使命感）。

「良いぞー武藤!!お前は歴史を変えたぞ!!」

「黒紅……お前もかー!」

そんな大声を出していると

「キンジ、これ。さっきのベルト」

と、いきなりベルトをキンジに放り投げてきた。

「理子分かった！わかつちやった！——これ、フラグばつきばきに立ってるよー!」

キンジの左隣にいた理子がガタン！と立ち上がった。

「一体何が分かったんだ理子！」

面白そうなので目配せして合わせる。にいつ、と笑う理子の目は「分かっているじゃん」とでも言っていてそうだ。

「キーくん、ベルトしてない！そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！これ、謎でしょ謎でしょ!??でも理子には推理できた！できちゃった！」

「理子！一体どういう事なんだ！その推理を聞かせてくれ！」

「おい黒紅お前ワザトだろ!!」

チツ、キンジにバレた。だがそんな事で止まる理子ではない。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！つまり2人は——熱い熱い、恋愛の真っ最中なんだよ！」

その言葉を聞いたクラスはさらに盛り上がった。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間にな!??」「影の薄いヤツだと思ってたのに!」「女子どころか他人に興味なさそうなくせに、裏でそんなことを!??」「フケツ！」

おうおうおう、言いたい放題だな貴様ら。我ちよつとカチンと来たぞ?」

理子に「物申す」とマバタキ信号を送る。OKサインを出されたので立ち上がる。

「おい待てお前ら！忘れてるだろ！キンジは女嫌いという渾名があるんだぞ！それにキンジには幼馴染の通い妻がいるんだぞ！毎朝弁当持って朝も昼も用意してくれる奴が！」

「なん…だと…!」「幼馴染だと!??羨ましい！」

「キンジにそんな良くしてくれる女子がいるだと☒」

「いや待て！つまりこのツインテールさんがキンジをNTRしたのか！」「なんて大胆なの！」

良い感じに混沌を招いた。満足だ。

「お、お前らなあ……………」

キンジが頭を抱え、机に突っ伏した時——アリアが二丁のガバメントを抜きざまに発砲してクラスを黙らせた。左右の壁に穴が空いたな。

「れ、恋愛なんて……………くっだらない！」

顔を真っ赤にしながらアリアはそう断言した。

……………あ？

「全員覚えておきなさい！そういうバカなことを言うヤツには……………」

風穴開けるわよ！

……………ほおん。くだらない。くだらないと片付けたか。

さて……………どう説明してやろうか…。

「……………神崎・H・アリア……………貴様言ってはならない事を言ったな？」

そう言っつて我はアリアに顔を向ける。

キンジが『げえっ！孔明！』みたいな顔して、アリアは少し驚く程度に顔を変えた。

「ちよ……………ちよつとコー君？一旦座ろ？ね？」

そう言っつて止めようとする理子は若干怯えてる様にも見える。

まあ此処で驚いてる奴らは全員知ってるからな。仕方ない。

「良いかアリア。恋愛はくだらない物ではない。

謂わば糧だ。その人間の為ならば通常以上の力を出す。

謂わば枷だ。その人間の為ならば通常以下の能力と化す。

謂わば奇跡だ。自分という存在を認めてくれるという証だ。

良いか。恋愛はくだらなくない。恋愛しなければ人は増えん。

絶滅するんだ。

恋愛は……くだらなくない。良いな?」

話してる間に顔を近づけてた様で、カタカタカタと震えて何度も頷くアリア。周りを見渡すと目に映ったクラスメイトがビクツと震えた。教師も震えて教壇に隠れてる。やり過ぎたか?

だが去年もこんなもんだっただろ。

「……たく……どれだけ素晴らしいか、専門科目授業の時に教えてやるよ」

「……アンタ、強襲科なの?」

「ああ。装備科武偵活動における装備品の調達、カスタマイズ、メンテナンス方法を習得する学科。装備科はその性質上、機材の一括買い付けを行なっているため、他よりも安価で他学科の生徒へ弾薬などを販売している生徒もいる。腕のいい生徒は、高額で武器の改造やメンテナンスを請負い、かなりの利益をあげている。と強襲科もSランクだ強襲科Sランクの生徒は、特殊部隊1個中隊と同等と評価される。そーいや3学期は目を合わせた事も無かったな。次の強襲科の授業、模擬戦しろよ」

「……そう……手加減しないでね」

「そいつは無理だな。手加減しないと新学期早々松葉杖で過ごす事になる」

「安心して。アタシだってSランクだから」

「……期待しないでいるよ」

昼休みになり、質問攻めに遭ったキンジを救い出して我々2人は屋上へと避難した。

「想像以上に聞きに来たな奴ら」

「こっちは今朝初めて会っただけなのに……」

「初めて会ったやつにベルト渡したのは何故だ?」

「あれは……ホックが壊れたから貸しただけだ」

「成る程。そんな紳士的な行動をするって事は、ヒステリアが発動し

たか」

「おい！普段は紳士じゃないみたいなきい方やめろ！」

「事実だろ？」

ヒステリア。 H i s t e r i a S a v a n t S y n d r o m e ヒステリア・サヴァン・シンドロームというのは、

遠山家に代々受け継がれる特異体質だ。

性的興奮、というより恋愛時脳内物質βエンドルフィン脳内で働く神経伝達物質の一種。鎮痛効果や気分の高揚・幸福感などが得られるため、脳内麻薬とも呼ばれる。を一定量分泌出来れば常人の30倍脳がフル回転して、銃弾を意図的に狙った場所まで跳弾させる事も出来る。

因みに俺も出来る（）。人類よ、これが神特権だ！

「…はあ…不幸だ…」

「しよぼくれてるなあ…」

そう言っていると、屋上に何人かの女子が喋りながらやってきた。

キンジはこそつと物陰に隠れた。情けない…聞き覚えのある強襲科の者だったので俺は無視してそこに居座る事にした。

「さつき教務科マスターズその名の通り教職員が所属している。前歴が自衛隊、警察OB、特殊部隊、傭兵、マフィア、殺し屋らしき人物が多数在籍しており、強襲科、地下倉庫と並ぶ東京武偵高の「3大危険地域」と呼ばれている。民間からの依頼の仲介は、教務科が行っている。

から出てた周知メールさ、2年生の男子が自転車を爆破されたってやつ。あれ、キンジじゃない？」

「あ。あたしもそれ思った。始業式に出てなかったもんね」

「うわ。今日のキンジってば不幸。チャリ爆破されて、しかもアリア？」

「どうやら今日の奴が教務科から流れたみたいだ。」

「あ、黒紅だ！」「今日は奥さんと一緒じゃ無いのー？」

「1人なんて珍しい」

「おう、今日は忙しいらしくてな。キンジも見失ったしな」

女嫌いのキンジの為に、此処は一芝居うっておくか。

後で軽いものを要求するが。

「面白そうな話をしてるじゃないか。俺も混ぜてくれよ」

「いいよー」「黒紅くんだしね」「刀子ちゃんとの奴も聞きたいし」

そう言いながら3人は金網の脇に座る。俺も隙間を開けて女子達の隣に座る。

「さっきのキンジ、ちよつとカワイソーだったねー」

「だったねー。アリア、朝からキンジのこと探って回ってたし」

「あ。あたしもアリアにいきなり聞かれた。キンジってどんな武偵なのとか、実績とか。『昔は強襲科で凄かったんだけどねー』って、適当に答えといたけど」

「アリア、さっきは教務科の前にいたよ。きっとキンジの資料漁ってるんだよ」

「うっわー。ガチでラブなんだ」

「……キンジにそこまで執着する理由が気になるな…」

ヒステリアを使う様なハプニングが起きて、あの数のUZIを倒したからか？それで自分の願いを叶えるつもりか。だがそれは…キンジの心を傷つける行為だな。

「キンジがカワイソー。女嫌いなのに、よりよってアリアにだもんねえ。アリアってさ、ヨーロッパ育ちかなんか知らないけどさ、空気が読めてないよねー」

「奴はイギリス出身だ。ヨーロッパ系統という線は合ってる」

「でもでも、アリアって、なにげに男子の間では人気あるみたいだよ？」

「あーそうそう。3学期に転校してきてすぐファンクラブができたんだって。写真部が盗撮した体育の写真とか、高値で取引されてるみたい」

「それ知ってる。フィギュアスケートとかチアリーディングの授業のポラ写真なんか、万単位の値段だったさ。あと新体操の写真も」

「よくもまあそんな事を…」

何を取引してるんだ貴様ら。恥じれ。かく言う俺も、写真部に刀子の色々な姿を収めるように頼みはしたが、あくまで個人アルバム用

だ。ほかの人間に渡らないよう元データやバックアップは全て削除している。

「ていうかあの子さ、トモダチいないよね。しよっちゅう休んでるし」「お昼も一人でお弁当食べてたよ。教室の隅っこでぽっーんって」

「……新天地に驚いて友も作れない状態か……ありがとうな。いくつか有益な情報があった」

そう言っただけ俺は立ち上がる。

「こんな話でも有益情報になるの？」

「ああ。情報は受け方を変えればどんな情報にもなる。これは饞別だ、受け取ってくれ」

女子三人に一人ずつ5千円を渡した。

「いいの?!」「太っ腹……!」「こんなにな?」

「気にするな。お前らはいいつも装備科の俺にメンテナンスを依頼するから、その礼も兼ねてだ」

強襲科と装備科の二つを中心に授業を受けてるからか、強襲科の生徒がよく来る。ただでさえ弾を撃ちまくって装備科のカモにされるというのに、自分の装備に俺の手を加えたいとたくさん来るのだ。メンテナンスついでに無駄遣いするもんだから、心が痛む。

「じゃ、大事に使えよー」

「『ありがとう……!!』」

さて、そろそろ動き出すかな？

第三弾 断固拒否

夕方。キンジと俺は男子寮に戻ってきた。

結局ずっとアリアの事で質問攻めにされてたので、俺が発砲して黙らせることになった。

刀でも良かったが、人が多いと銃の方が威嚇として役に立つ。にしてもそんなに怯えなくても……

「さて、夕飯の準備考えてなかったな」

部屋に入るなりキンジは制服を脱ぎ捨て、ソファに座り窓越しに東京を眺めていた。昼休み以降もクラスメイト達に拘束されたので仕方ないと言えば仕方ない。

朝に使ったセグウェイの残骸は鑑識科犯罪現場や証拠品の科学的検査を習得する学科。学内での事故や犯罪等の痕跡・遺留品の調査も担当している。探偵科と協力して捜査にあたることが多い。が回収し、探偵科探偵術インケスタと推理学による調査・分析を習得する学科。武偵高の中では比較的まともな教員が在籍しているらしい。キンジと理子が在籍している。外部からの依頼で迷子や行方不明者を探したり、未解決事件のプロファイリング、浮気調査なども行っている。も調査を始めた。だが精々分かるのは、変身武神鎧した俺の姿が自転車置き場のカメラに写っている事だろう。被害者のキンジはスルー気味にされてる。さて、今日の夕飯は……しまった食材が無い。コンビニ飯かな。

ピンポーン。

「…ん？客か？」

「な訳ねえだろ。誰が此処に来るんだよ……」

ピンポンピンポーン。

「…白雪ではないな。キンジ、出てやれよ」

「嫌だ。居留守を使いたい」

ピポピポピポピポピポピポピピンポーン！

ピポピポピンポーン！

「あー！うっせえなー！」

イライラしながら玄関へ向かった。まあ客人が誰だか分かるが。

「遅い！あたしがチャイムを押したら5秒以内に出ること！」

「か、神崎!?!?」

「アリアでいいわよ」

そんな会話と靴を脱ぐ音、とてとてと侵入する音が聞こえる。

「お、おい！待て、勝手に入るな！」

「トランクを中に運んどきなさい！ねえ、トイレどこ？」

「そのまま進んでみる。すぐ見える」

キッチンから話しかけると少しビビって1歩だけ引いた音がした。その後トイレに行くためにキッチンを通り過ぎててつ、ぱたん。と入っていった。キンジはストライプ柄のトランクを部屋に入れる為に頑張ってた。意外と重そうだなアレ。

トイレから出てきて手を洗ったアリアは出た後部屋の様子を窺ってる。

「あんた達2人だけなの？」

「まあな。本来俺の部屋は別だが、ある時を境にキンジの護衛として住んでるんだ」

「ふうん…まあいいわ」

そのままリビングの一番奥、窓の辺りまで歩いていった。興味が無いなら聞かないで欲しい…

キッチンから出てリビングに行くと、アリアが夕陽を背にこう言った。

「——あんた達！あたしのドレイになりなさい！」

……………まあ、敢えて一つ言うなら…………

「…お前憲法18条知ってる？」

「いやそこかよ!?まず不法侵入の件を問えよ!」

キンジのツツコミが炸裂した。いや普通に憲法違反じゃん。

知らんの?何人も、いかなる奴隷的拘束も受けない。又、犯罪に因る処罰の場合を除いては、その意に反する苦役に服させられないってあるんだぞ。

因みに「世界人権宣言」第四条にも、「何人も、奴隷にされ、又は苦役に服することはない。奴隷制度及び奴隷売買は、いかなる形においても禁止する。」ってあるんだよ?

「ほらー!さっさと飲み物ぐらい出しなさいよ!無礼なヤツね!」

そう言っつてぽふ!とソファに座った。組んだ足にはコルト・ガバメントという拳銃が二丁見える。

こいつ…シカトしたな!?

「コーヒー!エスプレッソ・ルンゴ・ドツピオ!砂糖はカンナ!1分以内!」

此処は本場の珈琲ショップじゃないんだが……

「……豆を挽くから3分待て。流石に1分では出来ん」

「あら。用意出来るのね」

「まあ、イギリス人のクオーターはお前だけじゃないって事さ」

そう言いながら豆を袋から出し、コーヒーミルに入れる。

豆を挽くレバーをぐるぐる回しながら、有名な肉焼き音を口ずさむ。何か回すとなるとこれやりたくなるんだよな。

「ほらよ。エスプレッソ・ルンゴ・ドツピオにカンナだ」

エスプレッソ・ルンゴとは抽出量を倍に……要約するとコーヒーを薄くという意味だ。ドツピオはエスプレッソ2倍、豆を20gで60ml抽出しろという事でつまり『Lサイズコーヒー味薄め』という事だ。因みにカンナは角砂糖1個という意味だ。

もう混ぜてあるので飲めるだろうよ。

「……ふーん…ちゃんとしたイギリス産の豆ね。どこのお店？」

「コス○コーヒー」

「あー。まあそこが普通よね……」

そう言いながら味を楽しんでるようだ。

「味なんかどうでもいいだろ。それよりだ」

同じ物をキンジも啜りながら、テーブルの椅子からアリアを指差す。

コラ。人を指さしちや駄目だろ。

「今朝助けた事には感謝してる。それにその……お前を怒らす様な事を言ってしまった事は謝る。でも、だからってなんでここに押しかけてくる」

キンジの口がへの字に曲がってる。アリアの方はカップを持ったまま、きろ、と目だけ動かしてキンジを見る。

「わかんないの?」

「分かるかよ」

「あんたならとづくに分かっていると思ったのに。んー……でも、そのうち思い当たるでしょ。まあいいわ」

「そんな適当でいいのかよ。大体あんた達って聞こえたが?」

なんか一瞬だけ空気扱いされたが、まあ些細な事だろう。

それよりキンジだけでなく俺も含まれているのか。

「……あんたも参加してもらおうわ武ノ神黒紅。Sランクなんですよ? それなら貴方も問題ないわよね」

いや困るんだが?

「おいおい。同じ強襲科とはいえ何も説明無しは困るぞ?」

「おなかすいた」

…腹立つなこの幼女体型……急に話題変えては手摺りに体をしなだれかけさせるし。

「なんか食べ物ないの?」

「図々しいなおい、良い度胸してるじゃねえか」

「お、おい黒紅落ち着けよ!」

こいつ……『もてなされて当然』な態度取ってムカつく…祖先がアレ

なら子孫もこうで仕方ない。思わず腰の刀に手が伸びてしまった。

「…今食材は切らしてるんだ。下のコンビニエンスストアで調達するつもりだ」

「ああ、あの小さなスーパーのことね。じゃあ、行きましょ」

「じゃあって何ででじゃあなんだよ」

「バカね。食べ物を買に行くのよ。もう夕食の時間でしょ」

「まあそうだな…行くぞキンジ」

「あ、ああ…」

話が噛み合わない。シカトもするし、本当に腹が立つ。このままだとストレスでどうにかなりそうなので2人だけで行こうとすると、アリアがソファからポーン！とジャンプして立ち上がった。

「ねえ、そこって松本屋の『ももまん』売ってる？あたし、食べたいな」
こいつ…：用事が終わったら叩き出してやろう。

ももまん。一昔前にブームになった桃型のおまんこ。

このアリアはそのももまんを、コンビニにあるだけの7つ全てを買ったのだった。

テーブルについたアリアは今正に5つ目を平らげたのだ。

キンジはハンバーグ弁当、俺は弁当ではなくパリパリ麺サラダをおかずにご飯を食べている。キンジは「早く帰れ」と目で訴えているが、そんな事は気にせずにアリアは六つ目を味わっていた。

「ていうかな、ドレイってなんなんだよ。どういう意味だ」

「強襲科アサルトであたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの」

「何言ってるんだ。俺は強襲科がイヤで、武偵高で1番マトモな探偵科インケスタに転科したんだぞ。それにこの学校からも、一般の高校に転校しようと思ってる。武偵自体、やめるつもりなんだよ。それに、よりよってあんなトチ狂った所に戻るなんて——ムリだ」

「あたしにはキラいな言葉が3つあるわ」

「聞けよ人の話を」

『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』。この3つは、人間の持つ無限の可能性を自ら押し留める良くない言葉。あたしの前では二度と言わないこと。いいわね?」

そう言い切るとアリアは最後の一つをはむっと食べて、指のあんこを舐めとる。

「キンジのポジションは——そうね、あたしと一緒にフロントがいいわ」

アリア：ポジションというのはもつと大人数の時に言うものだ。俺がいなくても二人で前衛に立つというバカの考えた作戦なんて普通思いつかんぞ。

「よくない。そもそもなんで俺なんだ」

「太陽は何故昇る?月は何故輝く?」

急に話が飛んで行ったな。というか質問に質問で返すな。

「キンジは質問ばかりの子供みたい。仮にも武偵なら、自分で情報を集めて推理しなさいよね」

その言葉には同意するが、もう限界だ。このわがままお嬢さんにガツンと言わなければ。

「調子に乗るなよアリア。誰もが実力者の言う事を聞くとしたら大間違いだ」

「何よ!あたしの言ったことに文句でもあるの?!」

「まず一つ、お前は自分勝手すぎる。キンジの実力だけ調べといて探偵科に移った経緯を調べてないからそういう我儘で身勝手な行動を取る。武偵以前に人として問題だ。面倒くさい」

「つぐ……」

「二つ、お前は不平等だ。聞きたくも無い言葉は誰しもあるだろうが話し相手の意見を無視してまで言うことでは無い。その上お前は生まれ育ちが身にしみて自分がもてなされて当然と思ってる。キンジはお前の素性は一切調べてないのに不平等だ。無理がある」

「んぐっ……」

「三つ、お前は隠しすぎている。奴隷といったが、仮にも関係者になろうとする人間に黙って力になれなんていうか普通。隠していることなのに途中で察しろと言われるのはごめんだ。知ろうとすることも疲れるんだぞ」

「……ううう……」

「いいか、お前のいう『人間の可能性を押しとどめる』ってのは言葉だけじゃない。人間そのものだってことがある。今のお前がまさにそれだ。どうやったらお前に手を貸してくれるのか、ちゃんと理解してから言え」

「……黒紅……」

俺から言われたことで少しは考えているのか、アリアは俯いている。キンジはこんな俺を見るのは初めてじゃない。というかこういう風にクラスメイトや下級生、上級生に物申したことがある。話を聞いた奴らは全員話しかけた時の勢いを失って、まるでしぼんだ風船みたいな声になる。まあ、言葉が響いたと考えればいいのだろうか。

「……私には……時間がないの……」

「時間がないからこそ時間をかけて説明しろ。人と関わるってことは、その人の時間を奪ってるんだぞ。それならいつそ、これから聞いてなかったと文句言われて時間かけないよう言っつてやるのが一番だ」

「……」
黙ってしまったので少し言い過ぎたのかと心配し始めると、急に立ち上がった。

「……どこまで説明していいかわからない……ちよつと頭冷やして考えたいから……お風呂使わせて……」

「おう。大いに悩め。夜は長い、時間もある。……キンジ。いいな？」

「……ああもう……わかったよ。話を聞いてやるよ。その代わりちゃんと交渉してくれ。言葉のキャッチボールはちゃんとな」

「……わかったわ……その……ありがと……」

そういつて脱衣所まで歩いて行った。それを見届けた後、キンジが問いかけてきた。

「黒紅。お前なんであんな奴に耳を貸すんだ？あんなに色々言ったり、あいつの事が嫌いなんだろ？」

確かにキンジの言う通り、俺が嫌いになる要素が多いものだった。だが……

「キンジ。あいつも言っていただろ。自分で情報収集すればわかることだ。俺は奴の事情とか全て調べがついている。だが見ただろ？あのままでは卒業して武偵になっても人様に迷惑をかけるだけだ。できそうな修正は今のうちにしておかないと本気で将来困ることになるんだ」

アリアが腹立つことをしていた事とアリアが頼みたい事は全く別物だ。ただ人に頼む態度に思えなかったから文句を言っただけだ。

「いいかキンジ。あいつに関する情報を明日ちゃんと調べろ。そうすればあいつが何故お前を選んだのかわかるはずだ」

「お、おい黒紅！お前何言ってるんだよ！俺は武偵をやめるんだって……」

「なら武偵最後の事件になるな。いいか？武偵憲章8条「任務はその裏の裏まで完遂すべき」を忘れるなよ」

「なんだその普通に終わらせる気がないような忠告は……」

普通じゃ終わらないからなこの事件……まあこう言えば否応なくアリアに協力してくれるだろう。

そんな風に安心しようとする

……ピン、ポーン……

慎ましいドアチャイムの音が響いたのだ。